

525

175



始





ト 哲 ン 國 カ

學 哲 の

著 風 詛 毛 稻

京 東

版 出 房 書 化 文

1924



序

私はカント哲學の研究者ではないが、哲學學徒として衷心カントを尊敬し専心カントの哲學の理會と活用とを庶幾しつつあるものである。殊に、目今努力の中心としてゐる「教育哲學」の研究上カント哲學及び新カント派哲學の恩恵を受けることが尠くない。この意味に於て、カントの生誕二百年に際してこの大哲を追慕憶敬するの情はかなりに強烈である。そしてこの感激が發動して三四の評論を生むに到つた。固より匆忙の際に成つたものとして、何れも識者に示し得るものではない。それにも係らず書肆の懇懇に従つて茲に一巻の書とするに到つたのは、斯くの如き小著も、この大哲の片鱗を描くことに即してその哲學を活用する一助ともなり得るかと思ふがために他ならない。若しそれ、カント哲學に關する研究の成果は、何れ將來に於て發表する機會があるであらう。

大正十三年仲春上浣

525-175

目次

カント哲學の要旨……………	一
人及び哲學者としてのカント……………	六
カントと我が思想界教育界……………	八
カントと教育者……………	二二
カントを紀念する途……………	一〇〇

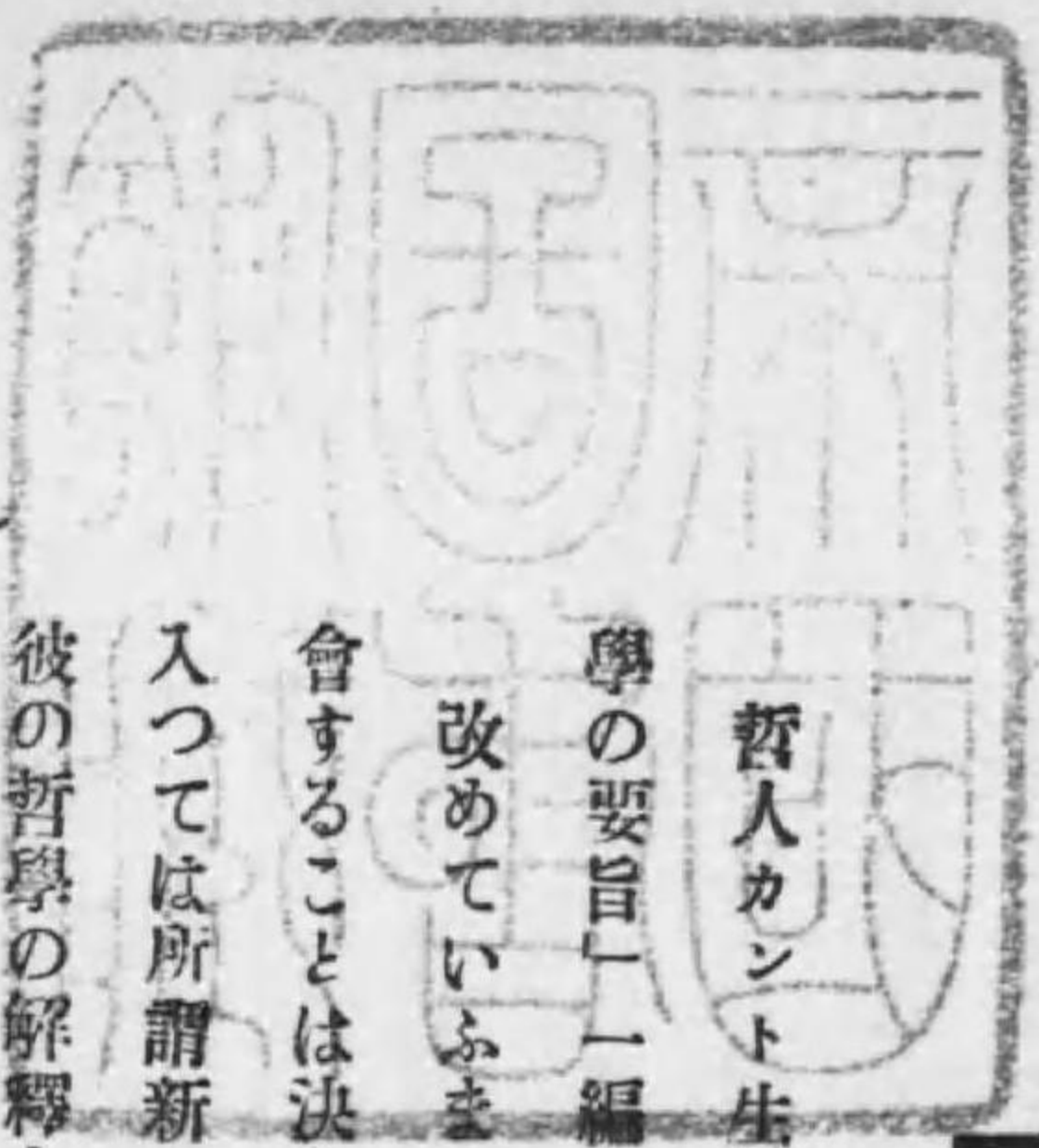
カントの哲學

カント哲學の要旨

序

哲人カント生誕二百年の記念祭が内外の哲學界に行はれようとする時に際し、茲に「カント哲學の要旨」一編を認めて、聊か哲學學徒としての祝意を表することとする。

改めていふまでもなく、カントは古今東西を通じて哲學界の第一人者であり、随つてそれを理會することは決して容易なことではない。事實、彼の後繼者は踵を接して現れ、殊に二十世紀に入つては所謂新カント派の全盛を見るに至り各人競つて彼の哲學を研究しつゝあるにも係らず、彼の哲學の解釋上尙幾多の矛盾扞格がある程である。随つて、彼の學說に對して妥當な批判を下すことは勿論、これを明確に解説することさへ決して容易なことではない。殊に私の如くカント



哲學に對する造詣の極めて淺いものに於てをや。それにも係らず、茲に敢て本文を草しようとしたのは果して何のためであらうか。一言にすれば、カント哲學の一般を闡明することによつて、今漸く優勢になりかゝつて來た教育界に於ける哲學的傾向の健全な發達に對して應分の寄與を致さんがためである。兎角は輕佻になり兎角は感淺になり兎角は新しいものに走りがちな我が教育思想界に、一味眞摯な風氣を導入せんがためである。随つて本篇は勿論専門哲學研究者の一覽に供する價值のあるものではない。要はカント哲學の要旨を誤りなく解説することによつて、未だカント哲學を知らない教育者諸君にカント哲學に關する一般の理會を與へると共に、幾分たりとも哲學的興味を喚起すれば、本文起草の目的は達しられたのである。若しそれカント哲學の眞相を具さに理會せんとする人は親しくカントの著書を繙くべきであり、カント哲學に對する徹底的な批判を聞かんとする人は權威あるカント研究者の言説に就くべきである。以下この見地から順次解説を試みることにする。尙カントは如何なる人であつたか、カント哲學が現代の我が思想界教育界に對して如何なる意義を有し、且如何にこれを活用すべきか、カント生誕二百年を如何に紀念すべきかといふやうな問題は、何れも當面の問題として最も價值あり最も興味あるものでは

あるが、これらに關する私の見解は、それ〴〵別な機會に發表して置いてたから、茲には全然割愛することとする。

二 カント哲學の意義及び特色

「カント哲學の意義は、一言にすれば、彼以前の哲學の主なる對立的要素を統一することによつて、哲學に全き體系と確乎たる基礎とを附與すると共に後代哲學の主流となつたことに存するのである。そして彼がこの大業を成し遂げるために用ゐた原理は「批判」である。カントの哲學が「批判哲學」と呼ばれるのも當然なことである。即ちカントはこの批判を原理とすることによつて在來の所謂獨斷的な諸哲學を一面的皮相的境地から救ひ出して一層全き哲學の一要素一部分に包括すると共に、彼自身の哲學をして單なる折衷調和の境地を超脱せしめて獨自の價值ある新哲學たらしめたのである。然るに件の批判は方法であると共に理論内容である。方法としての批判は論理的先驗的方法であり、理論内容としての批判は理性であり價值であり我である。そして時間的には方法は理論内容に先行すべきものであるかぎり、カントの批判哲學が先づ認識論即ち「純

「粹理性批判」となつて現れ、知識批判を以て第一着歩としたのは當然である。そしてその客観的
 價値に於ても、認識論はカント哲學の最高位を占むべきものである。實にカントは單に「純粹理
 性批判」一卷だけでも、コペルニクスが科學史上に於けるが如く、哲學史上の第一位に着く資格
 を有するものである。事實に於て、その他の論議は皆認識論を根據とし認識論の精神と方法を
 應用したものに他ならないのである。そしてこの點から見れば、現代の新カント派の大半が主と
 してカントの認識論を繼承するのはたしかに當然である。(斯くいへばとて私はカント哲學の他の
 部分を蔑視するものではない。否、私はカント哲學の目的は單に認識論の完成にあるのではなく
 て全體としての哲學を完成することによつて全體としての人間又は自我の價値を高めようとする
 所にあるのである。)極言すれば、道德論を以てカント哲學の精髓であるとさへするもので
 ある。要はカント哲學の全體から見ても哲學史から見ても、客観的に最も卓越したものはその認
 識論だといふのみである。

批判哲學は理性の哲學であり自覺の哲學であり價値の學であり創造の學である。哲學者として
 のカントの功績隨つてカント哲學の價値は、理性的創造的存在としての我を發見し且これを活用

することによつて哲學にコペルニクスの轉回を與へ、斯くして哲學を最も十分な意味に於て「自覺
 の學」とし「全體の學」とし「價値の學」とし「創造の學」とした點にある。この點に於てカン
 トはたしかに哲學の大成者であると共に大革命者であるといはなくてはならない。

實にカントは文字通に哲學の大成者である。彼の哲學は文字通に新しき革囊に古き酒を盛つた
 ものである。彼の哲學には、一般の天才者の思想に見るやうなすば抜けて卓越した所はなく全
 體として卓越してゐるのである。彼の哲學は何よりも先づ集成的であり折衷的である。在來の哲
 學に於ける對立的な主要問題を具さに比較研究するのが彼の哲學の第一段である。隨つて彼の哲
 學は表面から見れば殆ど二元論の觀がある。否、彼の哲學には嚴密な意味に於て二元論の要素が
 決して缺かないのである。たとへば感性と悟性、悟性と理性、純粹理性又は理論的と實踐理性又
 は實踐的、客觀と主觀、現象と本體、自由と因果、目的と機械、直觀の形式と悟性の形式、徳と
 法、福と徳、又は善と快・利等の對立が即ちこれである。(斯くして、カントの死後これらの對立
 的思想は再び分離してそれ／＼一面的な發達を遂げたが、最近卓越したカント研究者が續出する
 に至つて次第に根本的統一が試みられ、カントが企圖しながら達成し得なかつた目的が順次達成

せられ、随つてカント哲學の意義が一層明白になると共にその健全な發達を見つゝあるのである。そして茲にも亦カント哲學の價值——歴史的意義が存するのである。實にカント哲學の歴史的意義は、彼以前の諸哲學を集大成したと共に彼以後の哲學の本流に對する源泉となつた所に存するのである。事實ヘーゲルの死（一八三一年）後から新カント派の擡頭（カントに復れ）を反覆絶叫したリーブマンの『カント及びその亞流』の出たのは一八六五年）までの數十年間こそカント哲學は殆ど忘却蔑視されたが、ヘーゲル以前はフイヒテ・シエリング・ヘーゲル・シヨーベンハウエル・ヘルバルト等の大哲學者をはじめ、カント哲學の註解と祖述と改造とが少くとも獨逸哲學界の主潮を形造り、リーブマン後の新カント派に至つては最も熱烈にカントを崇拜し、最も精到にカント哲學を研究し、最も忠實にカント哲學を祖述し、最も妥當にカント哲學を改造するものが輩出し、且これらの人々の哲學が現代哲學の主潮を形造つてゐるのである。随つて現代の哲學を研究するには勿論、十九世紀否カント以前の哲學を研究するにさへ、カント哲學を度外視しカント哲學を理會することなしにはその目的を達成することが出来ないのである。

尤も前にも一言したやうに、十九世紀に於ては勿論現代に於てもカント哲學と反對するもの又

7
はカント哲學と系統流派を異にするものが決して尠くないのである。而もその多くはカント哲學に對しては勿論カント派の哲學に對してさへ一籌を輸するものであるか、さうでなければカント哲學と補合的地位に立つとかカント哲學の缺陷を指摘非難するとかいふやうな意味で、必ずカント哲學と何等かの交渉を有するものである。随つて苟くも今日眞面目に哲學を研究しようとするものは、少くともカントの批判哲學の精神と方法とだけは必ず活用すると共に何等かの點でカント哲學を超越することを要するのである。然り、苟くも將來眞面目に哲學を研究しようとするものは、カントが極力非難し闡明した獨斷哲學の誤謬を再び反覆することから免れると共に、カント哲學の長所を十分に助成し且その短所を十分に匡救することによつて、カント哲學の意義を發揮し且カント哲學を内在的に超越するやうにしなくてはならない。事實、今日及び近き將來に於ては、カント哲學との關係異同がやがてその哲學の價值である。この點から見れば、カント哲學は少くとも今日及び近き將來に於ける哲學研究の試金石であり標準であるといはなくてはならない。但し、斯くいへばとて私はカント哲學を完璧と見金科玉條とするものでないことは勿論である。

カント哲學の意義に關して論すべきことは尙無數にあるが、茲にはその餘白がないから遺憾ながら單にこれだけに止め、以下その三大分野即ち認識論・道徳論・藝術論の各についてその意義及び特色を略述し、然る後に三大分野の内容について順次簡單な解説を試みることにする。

第一に彼の認識論について見るに、何よりも先に特筆すべきは、カントが認識論の建設者たることである。認識論の意義と價值とを闡明すると共に自ら價值ある認識論を建設することによつて、認識論にはじめて十分な體系を附與したばかりか、更に全體としての哲學そのものに確乎たる論理的基礎を附與し、斯くして彼以前に於ける認識論上の二大流派即ち英の經驗論と佛獨の唯理論及び實在論と觀念論とを統一すると共に後代認識論の本源となつた所に、カント認識論の意義が存するのである。即ち彼はライブニッツ・ウオルフ等の獨斷的唯理論から出發し、ヒュームの懷疑論に接した結果、ロックが問題としなかつた認識可能問題を中心として批判主義の認識論を建設するに至つたのである。これを詳言すれば、カントは純粹理性即ち知と實踐理性即ち意とを嚴別すると共に現象界と本體界とを峻別して、認識論は純粹理性及び現象界のことであるとし、且認識論は認識の可能即ち認識能力の本質を闡明することから發足すべきものであり、そして認

識能力の本質を闡明するには發生的心理的方法即ち起源發達に依るべきではなくて、批判的論理的方法即ち價值・權利又は根據・條件・要素の闡明法に依るべきものとした。これ彼が自己の哲學を批判哲學と呼ぶ所以である。實に彼の哲學殊にその認識論の價值は批判的な所に存するのである。これを具體的にいへば、カントの認識論の長所は、理性を創造的發動的に見る結果、コペルニクスニの如く、認識の中心を客觀より主觀に自然より精神に移し、客觀や自然やその他一切の内外關係を主觀や精神の所産とし、随つて認識を現象界のみに限りながら、而も件の現象は超越的な物自體が吾々の主觀を觸發したもので、客觀的のものであるとした主觀論・觀念論的唯理論・現象論・人間本位論・創造論、主觀を先驗(天)的普遍的のものと見ることによつて主觀から出發しながら客觀の獨立及び認識の先驗(天)性・普遍妥當性・必然性を論證した先驗論、客觀や事物に關する研究を主觀の自己認識によつて成し遂げようとした自覺主義、主觀即ち認識能力の攻殻から出發して、理性は認識の形式的先天的要素で普遍性の根據であり經驗は認識の後天的實質的要素であるとすることによつて唯理論と經驗論とを調和した批判論、根本原理から出發し、歩一步雜多を統一して實有の聯絡を緊密にし、その關係秩序を明白にし、下級の總合形式を上級の總合形式の

内容とすると共に各總合形式の妥當性を明かにして行く論理的方法、知識の擴充進歩を圖らんとするために判斷中特に總合判斷の可能を認識論の主題とした總合哲學、實踐理性と純粹理性又は知と信とを區別して各その所を得しめ、且信又は實踐理性を知又は純粹理性の上位に置くことによつて知識と道德・學問と宗教・知識と信仰との關係問題を解決し、道德及び宗教に確乎たる基礎を附與した主意主義、主觀主義、獨斷的な形而上學を否定した認識論主義、價値の批判を主とした價値哲學、凡てを理性から闡明しようとした理性哲學又は文化哲學等は、何れも認識論師つて哲學の進歩に貢獻するところの大きな卓見である。

併しながら哲學が進歩を生命とするものであるかぎり、彼の認識論にも幾多の缺陷があるのは止むを得ない。就中最も顯著な缺陷は前にも一言した二元論である。即ち彼の哲學は調和統一を目的としながら、觀念論・唯理論・唯心論・主觀論に偏してゐた。理論理性と實踐理性との統一即ち從屬關係又は實踐理性の優位觀にさへ缺陷があつてその完成徹底はフイヒテをはじめ同一哲學者等や新カント派などの努力に俟たなくてはならない。直觀と悟性との關係に關する見解もかなり粗雑であつて時空の關係觀と同様にベルグソン等の訂正を俟つべきものである。十二範疇論

に至つては最も難點の多いものである。純粹理性の二律背反論も甚だしく曖昧なものである。心意の三分法にも疑義を容れる餘地がある。認識を現象に限りながら物自體の存在を假定したのも缺陷の大きなものである。形而上學を意志又は信仰の問題としたのはよいが、その他直觀體驗の學としての形而上學の成立する餘地がある點に於て形而上學觀にも未だ間然するところがある。直觀や範疇のみを先天的とする理由及び理由の發見法上にも疑點がある。この他部分的な缺陷はまだあるが茲には詳述の餘地がない。尙カントの認識論の祖述者は非常に多くて列擧に遑がない程である。

11
 第二にカントの道德論について見るに、認識論程ではないがたしかに獨自の價値を有する見解である。少くとも自律又は自由を道德の精髓とし、人格の尊嚴を力説し、意志・義務又は道德律の價値を重視し、道德を生活の中核又は實有の精髓とし、實踐理性の價値を高調することによつて道德及び宗教の基礎を確立した點は、倫理學史上特筆大書すべきものである。只それが道德の普遍妥當性乃至必然性を論證することに努力を傾倒した結果形式說主觀論に偏した點と、宗教を偏に道德的に解したためにその特色を滅殺した點とは否むべからざる弱點である。事實カント以後

の倫理學史はこの弱點の匡救即ち形式説と實質説・主觀説と客觀説との調和統一に主力を注いでゐるのである。そしてカント以後の倫理學者で最も卓越した繼紹者はフイヒテ及びリッブスである。宗教論に於ても彼の見解に満足しないものがシュライエルマツヘルをはじめ多數續出してゐる。殊にその物自體の存在を肯定する點は今日の新カント派の殆ど凡てが非難する如く、たしかに大きな弱點である。超越神論も三大基本要説も非難の餘地がある。

第三にカントの藝術論について見るに、これ亦歴史上重大な地位を占めてゐる。即ち、彼は先づ藝術を無目的の合目的性又は自由な觀照乃至遊戯であるとする見地から藝術的關心と理論的及び實際的關心との間に明劃な區別を立てることによつて藝術の獨立性を確保し、且この點に於て彼以前の唯理派の藝術哲學に反對し、次に美を純粹に主觀的に理想主義的に解することによつて前人未發の新領野を開拓し、最後に美の心理的説明を企て、且この三點は何れも後代藝術哲學上の宿題として幾多の問題乃至研究者を惹起した點に於て藝術哲學乃至美學の發達に貢獻した所が多であり、隨つて彼を以て近世美學の祖と稱することは決して不當ではない。そして彼の藝術論を最も忠實に繼紹し最も健全に發達させたものはシラーであり、その自然觀を祖述改造した

ものはシェリングである。但し彼の藝術觀は社會的乃至社會學的根據を缺如する點に於て完璧を以て許すことが出来ない。否その心理的根據にすら間然すべき點がある。彼の藝術觀が形式説に偏してゐるのも缺點である。これ彼の後にギョーヤリツアス等の起るべき所以である。若し夫れ彼の自然觀に至つては、自然を目的的に見た點だけはよいが、その他はかなり粗雑なものである。少くともその目的論乃至意匠論も有機體論も確乎たる生物學的根據を缺く點に於て、ダーヴィンやベルグソン等の修正を俟つべきものである。最も遺憾なことは「判斷力批判」の中心目的であつた純粹理性と實踐理性・知と意・認識と信仰又は學問と道德宗教との統一が十分に達成されなかつたことである。

翻つて思ふに、カントの哲學はその規模の廣大にして組織の整然たる點に於て獨逸哲學の典型であると共に古今稀に見る體系的哲學である。そしてこれは勿論カントの性格に原由するものであるが、一つは彼の教養の結果である。實にカントは當代の哲學全體に就いて滿遍なき研究を試みたのである。併しながらカントの主力を注いだものは認識論でありこれに次ぐものは道德論・藝術論であり、そしてその客觀的價値も亦これに順するのである。所謂三大批判「純粹理性批判」・「實

「実践理性批判」「判断力批判」が数ある彼の著述(全體で二十三部)の代表作と見られる所以である。随つて彼の哲學の要旨を闡明するにはこの三方面を對象にすればよいのである。本論に於て認識論・道徳論・藝術論の三項に別つたのもこれがために他ならない。但し、カントの道徳論と藝術論とは普通の意味に於ける形而上學に該當するもので、前者には道徳哲學と宗教哲學とが包含され、後者には藝術哲學と自然哲學とが包含されてゐるから、本論に於てもこれらの諸方面を一わたり解明することとし、更に本誌が教育雜誌であるといふ理由から彼の教育論の要旨を添へることとした。随つて讀者は本論によつてカント哲學の要旨を一通り理會することが出来る筈であるが、この他に尙法理哲學・歴史哲學及び自然科学に關する學說があることを忘れてはならない。諸君にして若しカント哲學の全體を理會しようとするならば、これらの諸方面をも研究しなくてはならない。

三 認識論の要旨

「カント認識論の目的は、「如何にして先天的綜合判断が可能であるか」、即ち「經驗的ならずして吾

々の知識を擴充する認識はないか、分析的ならずして普遍性必然性を具へた認識はないか、」又は「如何にして吾々は客觀世界について先天的にして普遍的必然的な認識を有し得るか」といふ問題を解決して、ヒュームの懷疑論及びウオルフの獨斷論を根柢から打破し、在來の實在論と觀念論・經驗論と唯理論等の對立的の一面觀を統一し、斯くして認識の起源・限界・本質を闡明すると共に、知識の擴充進歩の動力を提供し、且知識と信仰との基礎を確立することの出来る認識論を組織建設するにある。そしてこの目的を達成するために、彼は先づ認識能力を研究して認識の對象としての客觀を單に現象界に限り、且それは主觀から獨立して自存するものではなくて主觀の構成したものであるとすると共に、認識の主觀は形式的のものであり、随つて經驗的個人的ものではなくて先驗(天)的普遍的なものであるとし、且これを根據として前記の問題を解決したのである。尙カントの認識論を述べたものは「純粹理性批判」(一七八一年出版)及び「哲學序説」(一七八三年出版)の二書である。

「カントは心意を知情意の三面に別ち、且知と意とを廣義の理性と呼び情を判断力と稱し、更に理性を純粹と實踐とに別ち前者を狹義の認識力とし且これを感性と悟性と狹義の理性(理念)とに

三分してゐる。勿論これは作用上の分類であつて、心意の本質は創造的普遍妥當的な理性である
と見るのがカントの人性觀の本領である。然らば純粹（理論）理性と實踐理性とは如何なる關係
を有するであらうか。兩者は先驗（天）的・普遍的・必然的である點に於てはその揆を一にするが
只前者は認認を職能とし自然又は現象を對象とするのに對して、後者は實行を職能とし道德又
は本體を對象とする點に於て、その趣を異にするものである。然るに認識論は、現象分内の事象
のみを取扱ふものであり隨つて純粹理性を動力とするが故に、本體については何等の斷定をも下
すことが出来ないのである。然らば謂ふ所の純粹理性とは果して如何なるものであらうか。

前述の如くカントは廣義の認識力を感性・悟性・理性の三種に別け、且感性は悟性の悟性は理性
の内容となるものとしてゐる。感性とは直觀のことで認識の素材たる感覺の總合であり、時間及
び空間を理會する形式である。悟性とは範疇のことで直觀の總合であり、認識の成因たる判斷作
用を中核とするもので、法則及び經驗的知識の動力である。理性とは經驗的判斷の總合で、原理
及び超經驗的形而上學的知識の動力である。狹義の認識力は感性と悟性とであり、道德力は理性
である。隨つて何ものでも認識の内容となるには必ず感性か悟性が即ち先天的な直觀形式か思

惟形式（範疇）かの關門を通過すべきものであり、自ら必ず何等かの改造變形を加へられるのであ
る。これカントが認識隨つてその對象たる客觀即ち現象としての自然を主觀的觀念的のものとし
ると共に、認識分内のものは本體ではないとした所以に他ならない。そして感性は雜多な内容で
あり悟性は統一ある形式であり、感性は受動的であり悟性は發動的であるが故に、認識は兩者の
協働によつてのみ可能である。即ち經驗的に獲たものを概念的に組織してのみ認識が可能なので
ある。これカントが「認識は經驗を以て始まるが經驗から起るものではない」とした所以である。

但し認識力としては悟性が感性の上位を占めることはいふまでもない。實に認識は悟性の最高作
用であり隨つて悟性は自然界の立法者である。この見解は、唯理論と經驗論とを統一したもので
哲學史上極めて重大な意義を有するものである。即ち彼は理性は認識の先天的要素即ち形式であ
り經驗は認識の後天的要素即ち内容であつて兩者の結合によつてのみ普遍的必然的にして綜合的
な認識が可能であるとする事によつて、唯理論も經驗論も各全き認識論の一面づゝを道破した
ものに過ぎないとしたのである。換言すれば經驗論者は一切の認識に發動的性質あることを忘れ
唯理論者は一切の認識に受動的性質あることを忘れた點に於て等しく正しき認識論の一要素に過

ぎないとしたのである。更に別言すれば認識の起源から見れば唯理論が正しく、範圍から見れば經驗論が正しいとしたのである。畢竟するにカントは「經驗」の概念を改造して對象に對する先天的總合判斷の可能を肯定しようとしたのである。即ち理性の總合作用があらゆる經驗の形式的條件として存在するが故に經驗の先天的認識が可能であるが、而もそれは單に經驗的對象に對してのみであるとしたのである。然らば感性と悟性とを結合するものは何であるか。それは想像力である。實に想像力は時間の直觀に於てそれが供給する素材より概念に該當する形像を造ることによつて感性と悟性とを結合する能力である。これ時間の直觀が、先天的にして純粹な點で範疇と同一であり直觀的感性的な點で知覺と同一な所以である。

（以上の見地から、カントは先づ時空の先天的なことを根據として先天的總合判斷が普遍必然なことを論證しようとしたのである。）これを詳言するに、時（間と）空（間と）は其自身に存在する所の實有又はかかる實有の屬性ではなくて、吾々の心意に本具し、且吾々の心意が感覺を感じる時の作用・法則即ち直觀の形式又は感性の不可欠的條件に過ぎない。但しこれは經驗に先立つて獨立に作用するといふのではない。然るに一切の觀念はその起源から見れば純粹（先天的）か經驗的か

であり、その性質から見れば直觀か概念かであるが、時空は經驗的でも概念的でもなくて純粹（先天的）直觀である。第一に時空は經驗的概念ではない。蓋し現象の繼起は既に時間を豫想し現象の俱在は既に空間を豫想するからである。經驗が時空を可能ならしめるのではなくて時空が經驗を可能ならしめるからである。時空が感覺の抽象ではなくて感覺の豫想だからである。第二に時空は先天的必然的觀念である。吾々は現象のない時空を思惟することは出来るけれども時空のない現象を思惟することが出来ないからである。第三に時空は分析的普遍的概念ではない。時空は只一つだけで種々の時空は唯一時空の一部であり、そし單に一個の對象から生ずる觀念は概念ではなくて單一觀念即ち直觀だからである。第四に時空は無限である。一定の時空の大きさはその根本たる單一時空を區別したに過ぎない。要するに、時空によつて經驗が成立するものであつて經驗に依つて時空が成立するものではない。

（時空が先天的直觀であるといふことは、時空は吾々が對象を直觀する際には必ず従ふべき法則及び形式で時空がなければ對象の直觀も直觀の對象もないといふことである。そして時空の先天的なことは認識の必然的なことの實在根據であり、認識の必然的なことは時空の先天的なことの

認識根據である。時空の先天的なことは、あらゆる経験の對象に妥當であることを證明すると共に、彼等が経験の範圍を超えることが出来ないことをも證明するものである。即ち時空は一切の経験に妥當であるけれども物自體には應用することが出来ない。更に時空は經驗的實在性を有すると同時に先驗的觀念性を有するものである。時空は經驗の對象としての一切物に對しては客觀的であり即ち經驗的には實在であるが、絶對的に論ずれば時空は主觀を離れる時は虚無であるが故に實在ではない。随つて時空に於て直觀されるもの及び吾々の認識は現象的であつて本體的ではない。若しもパークレーのやうに一度時空に絶對的實在性を許す時には吾々の存在そのものすら迷妄となるのである。但し時空は感性的直觀の形式であるが故に、その素材内容たる感覺が特殊であるのに對して普遍的であり、感覺が經驗的で人々によつて異なるのに對して先天的で萬人同一である。尙カントは時空に規定された感覺を知覺と呼んでゐる。

然らば時空は如何なる點に於て異なるであらうか。一言にすれば時間は内面的感覺の形式であり、空間は外面的感覺の形式であり、そして内面的感覺から内面的對象の認識を得、外面的感覺から外面的對象の認識を得るものである。然るに一切の寫象は悉く内面的對象に屬するが故に、時間は

あらゆる現象の形式である。随つて時間的といふことは主觀的先天的といふことであり普遍的必然的といふことである。尙カントは數は直觀であるといふ理由から、數學的認識及び數學を以て先天的總合判斷であり、随つて必然性普遍性を有するものとしたのである。

翻つて思ふに、認識は凡て寫象と物體との統一調和によつて成立するものである。そしてこれを正當に可能ならしめるのは物體が寫象を可能とする場合と寫象が物體を可能ならしめる場合とである。前者に従へば、寫象は普通の感覺と同じく單に經驗的のものとなるが故に、経験を先天的なものとするがためには、寫象が物體を可能ならしめることとすなくてはならない。茲に範疇論必要の根據がある。

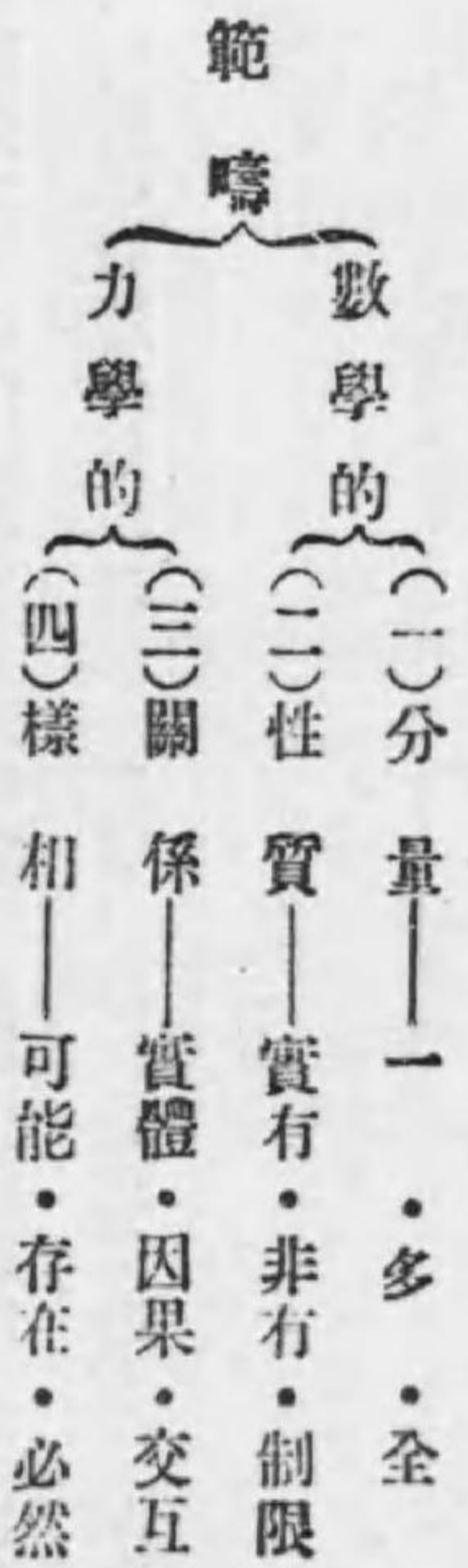
範疇論の問題は、(一)純主觀的概念たる範疇が如何にして客觀的認識の規定を爲し得るか、(二)悟性の形式たる範疇が如何にして感性和合同するか即ち如何にして範疇は經驗の對象に應用されるか、(三)經驗の説明は絶對的であるかの三點に要約することが出来る。そして第一問に答へるのが認識本質論であり、第二問に答へるのが圖式論であり、第三問に答へるのが物自體論である。以下この三問題に關するカントの見解を極めて簡単に叙述することとする。

カントに従へば、範疇は要するに現象又は經驗的知識の構成原理である。即ち空間的性質を有する感覺的直觀的素材を總合一する先天作用で、思惟又は悟性總合の形式、即ち吾々が外物を認識してこれを概念とする際に必要な形式である。そして範疇は經驗を起源とするものではなくて經驗的認識を可能ならしめる要件根據であるから、直觀の形式と同様に先天的普遍的必然的のもの即ち純粹悟性概念であり先驗(天)概念である。随つて範疇を定めるには經驗的事物を基礎とすべきものではなくて判断の形式を基礎とすべきものである。即ち吾々の認識から一切の感性的直觀的要素を除去すれば純粹な悟性認識の要素としての純粹な根本概念即ち範疇を獲ることが出来るのである。只範疇は概念であるが故に、その對象に對する關係は直觀の如く直接的ではなくて間接的である。斯くして經驗乃至自然は範疇に依る主觀の構成であり、随つてそれは先天的認識の對象たり得ると同時に、範疇が一切の經驗乃至自然に對して妥當となることが出来るのである。

さて範疇は思惟の形式であり思惟は判断であるが故に、範疇は判断である。然るに判断は寫象の結合即ち悟性作用である。この結合は主觀自身の自發作用であり、随つて範疇は主觀の所産で

ある。然るに結合は結合さるべき雑多な内容の概念と總合作用の概念と單一の概念を包含するものである。第一のものは客觀又は對象であり、第三のものは主觀又は意識である。そして後者が主であることはいふまでもない。然るにこの結合の主體となる主觀又は意識は受動的直觀的のものではなくて發動的判断的のものであつて、「先驗的統覺」、「純粹自我意識」、「生産的想像力」又は「意識一般」と呼ぶべきである。これは決して認識の對象即ち内容とはならないで、何時も認識の主觀となつて、あらゆる對象の基礎となり、あらゆる認識を可能ならしめるものであり、随つて形式的のものであると共に普遍必然的なものである。

さて範疇が成立するには、感覺の領會即ち直觀の總合・その再生即ち想像・その認識の三段階を経過することを要する。然るに範疇は悟性の形式であり、悟性は判断の動力であるが故に、範疇を發見するには論理學上の判断作用の分類表に依倚しなくてはならないし、随つて各範疇はそれら特殊の判断作用に現れる主賓の結合方法である。左表は、所謂カントの「十二範疇」である。



尙右の分類中、各種の範疇の第三類即ち全・制限・交互・必然は何れも第一類第二類の結合から生ずるものである。そしてこの中カントが最も重要視したものは關係の範疇殊に實體及び因果である。

既に一言したやうに、範疇が如何にして感性と合一し如何なる方法で經驗の對象に應用されるかといふ問題、即ち悟性と感性との關係問題に對して解答を試みたのが所謂圖式論である。別言すれば悟性が經驗を構成して見るが如き自然界を作爲したことを闡明するのが圖式論の目的である。圖式とは悟性の形式を直觀的に表明したもの又は悟性の形式を抽象的な概念以外の形像に現したもので、畢竟するに概念の時間化具體化である。各範疇はそれ／＼固有の圖式を有するものであり、そして圖式は一切の經驗以前に範疇を時間の直觀中に表現するものであるが故に、先天

的な總合判斷即ち純粹概念を經驗に適用して認識を可能ならしめることが出来るのである。斯くの如き判斷は認識の最後の根柢であるから原理と稱すべきである。そしてこの原理の分析は純粹自然科学の基礎となるのである。然らば圖式を作成するものは何であるか。その動力は感性と悟性との中間に位する想像であり、その内容となるものは時間である。蓋し時間は前述の如く直觀の内的形式であつて、一切の現象の根本動力であると共に悟性の形式と同様に先天的だからである。斯くして圖式は時間の列・時間の内容・時間の順序・時間の概念の四つとなる。尙上記の原理には分量(直觀の單元)・性質(知覺の豫料)・關係(經驗の比論)・様相(經驗的一般の基本要求)の四つがある。そしてこれら純粹悟性の原理は最も普遍的な自然法で、經驗的な自然法はその特殊な規定である。尙自然とは一言にすれば感性で直觀すると同時に悟性で思惟した總合體である。

以上要するに、カントに従へば先天的判斷が妥當性を有するのは只これを適用すべき對象が悟性自身の所産に係る場合のみである。斯くして彼は純粹直觀の根據から純粹數學の可能を論證したやうに、純粹概念の根據から純粹自然科学の成立を可能としたのである。即ち彼は數學及び自然科学を先天的普遍的な認識としたのである。

前述の如く吾々の認識は感性に始り悟性に中し理性に終るものである。そして悟性は判断であり法則の動力であり、構成原理であるのに對して、理性は推理であり原理の動力であり、統制原理である。悟性の概念は経験を可能ならしめるものであるけれども、理性の概念即ち理念は一切の経験を超越する形而上學的現象を要求するものである。吾々の認識は相對的であるのに對して理念は絕對的である。随つて理念は學問の理想目的であつて認識を超越するものである。吾々は經驗的認識だけで満足しないで完全な絕對的統一を圖らうとする時には経験を超越した原理たる理念に依らなくてはならない。即ち絕對的統一を圖るもの——絕對の能力乃至絕對の要求者が理性であり、絕對的統一を圖るために用ゐる觀念が理念である。但し理念は概念以外別に存在するものではなくて寧ろ只概念を絕對的に用ゐたものである。即ち概念を相對對統一を與へるものとしてのみ用ゐる間は經驗の範圍又は認識の對象を超越することはないけれども、これを絕對的統一を與へるものとして用ゐる時には理念となるのである。但し、理念はそれに對應する對象を持つてゐないものである。

斯くの如く理念は認識の要求であり理想であり最高規範であり、随つて認識の對象となり得な

いものであるが故に、これを本體界の認識に應用してこれに對應する本體即ち所謂「無制約者」の有無を論證したり、その性質を規制したりすることは不可能である。カントがこの理念即ち靈

魂・世界・神をその對象に應用することを不當とし、随つて理念を客觀的實有と見るもの、即ち靈魂を對象とする唯理的心理学・世界を對象とする唯理的宇宙論・神を對象とする唯理的神學を獨斷的形而上學の名の下に否定したのは、蓋しこれがためである。但しカントが在來の形而上學を否定したのは先驗的假象即ち超經驗的な物自體や本體としての自然を知るものとしては成立しないとしたのみであつて、別言すれば靈魂や宇宙や神やの存否及びその本體は理論理性によつて認識し理論的に證明することが出来ないとしただけであつて、その存在を否定したのではない。これらは認識の限界概念であるが故に知又は認識の對象ではなくてその要求假定即ち意又は信仰の對象としたのみである。獨斷的常識的な形而上學を否定して、形而上學は只現象としての自然を知るもの、先天的知識の自覺・純粹理性の科學又は信仰乃至道德としてのみ成立が可能でも必要でもあるといつたのみである。畢竟するに、偽形而上學を否定することによつて信仰即ち眞形而上學を確立したのである。カント曰く「信に場所を與へんがために知を制限したのである。」そし

てこの點はカントの認識論の功績である。因にカントの認識論上の主著たる「純粹理性批判」は純粹數學の可能・純粹科學の可能・形而上學の可能の三大問題に對する解答であり、そして彼は前二問を肯定し第三問を否定したのである。斯くして彼は實踐理性の批判に入らなくてはならない。然らば兩理性は嚴密には如何なる關係を有するであらうか。

一言にすれば、純粹理性は自由と必然、本體と現象又は睿智世界と經驗世界との關係を理會することが出来ないけれどもこれを否定することも出来ないが、而も自由や本體や睿智世界が存在すると思惟——消極的に認識することが出来るが故に、實踐理性が自由は必然の根柢であり本體や睿智世界は現象や經驗世界の根柢であるとするに服従しなくてはならない。これ即ち「實踐理性の優位」である。要するに、カントに従へば、純粹理性が消極的であり實踐理性が積極的であり、随つて吾々は只實踐理性によつてのみ眞實有を理會し、眞生活を營み、眞人となることが出来るのである。斯くしてカントは認識論に於て否定破壊したものを道德論に於て肯定再建したのである。敢て問ふ。カントの道德論とは抑も如何なるものであらうか。

四 道德論の要旨

純粹理性の對象たる認識の世界は現象(因果・存在)の世界であつた。實踐理性の對象たる道德の世界は現象以上の世界即ち本體(目的・價值)の世界である。本體の世界は時空と因果とを超越した自由の世界である。そして本體の世界は現象の世界より一層高次の世界即ち眞實の世界であるが故に、實踐理性は純粹理性より優位を占めるのである。随つて單にカントの認識論のみを以てカント哲學と見ることは勿論、認識論を以てカント哲學の主要部分と見ることも亦斷じて謬見である。極言すれば、カント哲學の眞髓は寧ろその道德論にあるといはなくてはならない。殊にカントその人が最も偉大なる道德的天才でありカントの生活そのものが最も明白に道德的であることに思ひ及ぶ時には、決してその道德論を輕視することが出来ないのである。以下、この見地からカントの道德論の要旨を叙述することにする。因に、カントの道德論は、宗教論をも含むもので、普通の用語法に従へば、形而上學に該當するものである。

さて、既に一言したやうに、カントの知識哲學は、認識を現象界に限る點に於て現象哲學であ

つた。然るに、カントに従へば現象界は物質の變化と人間の行爲との二面を有する。物質の變化は自然現象であり人間の行爲は道德現象である。そして道德現象の内而實質が道德でありその外面形式が法律である。随つて道德現象を研究する哲學の分野即ち道德哲學は徳論と法律論とに分れなくてはならない。併しながら、道德哲學の開始に先立ち、「果して自然現象以外に道德現象が存在するか。随つて又自然律以外に道德律が存在するか」といふ問題を解釋して置かなくてはならない。そしてこれが『グランドレーグング、ツール、メタルフィジク、デア、ジツテン道德哲學原論』(一七八五年出版)の使命である。即ち本書は道德律を研究したものである。

「道德律存在の有無」の問題が解決された後に起る問題は、「道德律に符合する道德的能力の存在」といふことである。勿論、道德律が既に存在するとすればこれと一致する所の道德力が存在しなくてはならない。道德力のない所には道德律があり得ないからである。道德律が眞に生命を有するのは、只主觀的にこれに適應しこれをして活潑潑地たる活力を得しめる道德力が存在する場合にのみ限られるからである。そしてこの道德力を研究の主題としたものが『プラクティシエ、デア、モラル實踐理性哲學』(一七八八年出版)である。別言すれば、『プラクティシエ、デア、モラル實踐理性哲學』の使命は理性が意志を規制し得るか否

かを明かにして道德の普遍妥當性の根據を確立するにある。

道德律と道德力とを研究した後カントはその倫理學の體系を試みてゐる。それが即ち『メタフィジツシエ、デア、モラル道德哲學』(一七九七年出版)である。因に、カントに従へば、倫理學の任務は規範を立てることも義務の理由を説明することでもなくて、諸多の義務を普遍的法則に還元することにある。

これを要するに、カントの道德論の目的は、「先天的な實踐總合判斷即ち理性的な意志の根本法則が存するか否か、理性が經驗的動機を顧みることなしに先天的に希求するものがあるか否か、又は意志は道德の對象に對して普遍的必然的な關係を有するか否か」といふ根本問題を解明することによつて、道德の成立を可能ならしめる根據を確立することにある。そしてこれに對する解答の要點は畢竟するに左の如くである。曰く。先天的な實踐總合判斷又は理性意志の根本法則即ち道德律は存在する。そしてそれは實踐理性の自律性であるが故に普遍的必然的である。實踐理性をして自律的ならしめるには善なる意志即ち義務のために義務を行ふこと又は道德律に對する畏敬を以て動機としてその成果に囚れないやうにしなくてはならない。

尚、カントは、その認識論に於ては偉大なる集成者統一者であつた程、その道德論に於ては集

成者統一者ではなかつた。即ち、彼の道德論上の立脚地は、批判主義・主意的理性(想)主義・形式説・克己説・嚴肅説・人格説・主觀説・良心説・動機説・自律説・規範説・先驗説等を以て形容することが出来る。

さて、カントの道德論は、前述の如く、畢竟、「如何にして意志活動中に先天的總合判断が可能であるか」を論證するにある。別言すれば先天的に意志の法則を立てるにある。然るにカントに従へば、先天的なものは質料ではなくてあらゆる意志活動に普遍妥當的な法則即ち形式である。經驗的に立てられる法則は普遍妥當的ではなくて、只先天的に立てられる法則のみ普遍妥當的である。随つて、道德は形式的普遍妥當的にして法則的なものである。法則的とは即ち普遍妥當的といふことである。そして道德の普遍妥當的な法則を立てる動力は「實踐理性」である。然らば意志活動に普遍妥當的な形式とは何であるか。一言にすればそれは「善なる意志」である。善なる意志とは、義務に適つた意志即ち義務のために義務を行はんとする意志である。道德律に合致した意志である。意志活動そのもの又は意志の原理たる形式に合致することを目的として意志活動の結果を目的とせず、随つて意志活動を他の方便としない意志である。然るに意志とは明晰な理由に

従つて行動する能力即ち意識的寫象であり理性的行動力であり所謂實踐理性である。随つて善は方便ではなくて其自身目的であり、結果ではなくて動機である。動機とは意志を決定する標準としての主觀的原理即ち格率である。斯くして、「汝の意志の格率が普遍妥當的にして必然的な法則となるやうに行動せよ」といふ命令に従ふ時にのみ動機随つて意志及び行爲が善となり道德となるのである。實に、カントにあつては、義務感と合法的とは同一事である。然るに人性には實踐理性に反する本能——性向がありそしてこの性向を制壓しなければ善意に達することが出来ない。即ち德は性向に打ち勝つこと又は打ち勝つた結果である。茲に義務の源泉がある。そして義務とは道德律が吾々の行爲に對して課する要求である。随つて行爲が義務から發生したか否かを明かにするには性向を参照しなくてはならない。即ち、義務と性向とが相反する時には義務から發した行爲であり、且義務の履行が德である。そして茲に彼の克己説の根據があると共に、彼が道德を以て與へられた事實でなくて解決すべき課題であると見、随つて、道德律を必然的な自然律から峻別して當爲の法則即ち規範と見た基礎がある。

カントは、合法的といふことを重大視して知識は認識する精神の合法性であり道德は意志する

性格の合法性であるとしてゐるが、彼は道德上の合法性を法律的のものとしてと道德的のものとの二つに別けてゐる。前者は行爲のみ道德律に合致してその動機が否らざるものであり、後者は行爲も動機も等しく道德律に合致したものである。眞に合法的なものは勿論後者である。随つて法律は道德を基礎とすべきものである。

義務を動機とする行爲が善だといふことは、義務を動機としない行爲が悪だといふことである。別言すれば善とは先天的な意志であり悪とは經驗的な意志だとすることである。そして善と悪との差は程度の差ではなくて種類の差であり、随つてそれは相對的ではなくて絶對的である。されば善を行はうとするには、性向や感情を抑制して偏に義務のために義務を行ふやうにすべきは勿論、義務の眞偽を正しく判別しなくてはならない。茲に道德的反省の必然な所以がある。そして睿智の性格としての人間は義務の眞偽を判別する力即ち良心を先天的に本具するものである。この點に於て、即ちウォルフ・ライブニッツ一派の功利説を排して良心説を提唱した點に於て、彼の倫理學史上の地位は恰も英國に於ける直覺派の地位に類似するといふことが出来る。尙カントは、上記「汝の意志の格率が普遍妥當的にして必然的な法則となるやうに行動せよ」といふ最高義務

を自己に對する義務・他人に對する義務その他の方面に分つてゐるが、茲にはこれを詳述する餘白がない。

善意を善と見ることは、やがて自律を善と見ることである。善意とは、意志がそれ自身の力に服従して、意志以外の何ものにも支配されないことだからである。理性の本質は自律にあるからである。そして意志の自律を善と見ることは、道德律は只道德律であるが故にのみ服従すべきものであると共に、道德律は實踐理性の自律であるが故に服従すべきものと見ることである。然るに、カントに従へば、自律が理性の本質であると共に理性は人間の本質であるが故に、人間の本質は道德に於て最も明白顯著に發動するのである。茲に道德の價値がある。

道德が自律的のものであるといふことは、道德の命令は、第一義的なもの、根本的なもの、總合的先天的なもの、無上なもの、定言的なもの、即ち理性あるものは便不便好悪結果を問はずに必ず遵守しなくてはならないものであることを意味する。道德的命令以外の命令は、凡て第二義的なもの、派生的なもの、分析的後天的なもの、假言的なもの、條件付なものである。命令そのものが目的ではなくてそれ以上なものの手段だからである。然らば道德的命令以外の命令が目的

とするそれ以上のものとは何であるか。いふまでもなく道德的命令そのものである。然らば道德的命令は無目的であるか。否、それは勿論目的的命令である。只それは目的そのものが目的で、他の手段となつたり他から引き出したりするものではないだけである。斯くして道德的命令は、その他の命令のやうに、主觀的相對的偶然的なもの又は實質的特殊的なものではなくて、客觀的絕對的必然的なもの又は形式的普遍的なもの、即ち如何なる人にも如何なる場合にも行はるべきものとなるのである。随つて、意志が或る特殊的實質的目的に影響される時には他律的となるのである。

カントが道德を形式的普遍的に見ることは、道德を純粹な實踐理性分内の事象と見て感覺や感情や本能や性向から獨立させることを意味する。義務のために義務を行ふとは、純粹な實踐理性の命令に聽順することである。斯くして彼は極力道德上の快樂説や功利説や感覺説や感情説を排したのである。彼の道德説が嚴肅説と呼ばれるのは、蓋しこれがために他ならない。

然らば善意即ち義務を動機とする行爲は何故に普遍安當的であるか。意志即ち實踐理性又は道德的主觀乃至良心そのものが本來超個人的なものだからである。随つて道德の普遍性は道德の内

容にあるのではなくて道德の形式たる普遍安當的な法則に従はうとする主觀の態度にあるのである。これ彼の道德觀が主觀説と稱せられる所以である。この意味に於て、彼の主觀説は道德の普遍安當性と矛盾するものではなく、自ら又所謂個人主義ではない。事實彼は自我が道德律に完全に一致することを以て道德の理想とし、且これを至善と呼んでゐるのである。

カントの道德説が所謂個人主義でないことは、彼の人性觀に徴しても亦明かである。即ち彼に従へば、人性の本質は一面から見れば合理的な所にある。人間は各自自己目的的存在であると共に、全體に於て「目的の王國」を造るものである。そして道德の終局目的は道德的世界秩序を建設することである。随つてカントに従へば、人は人間であるが人間共ではない。これと共に人間は意的存在であり、随つて「造られた善」ではなくて「善たるべきもの」である。然るに意志は道德可能の根據たる自由の動力であるが故に、人間が意的存在であるといふことは勿論道德的存在であるといふことを意味する。實に人間は道德的存在としてのみ經驗的現象的境地を超越して、睿智的本體的境地に進入することが出来るのである。但し、自由の動力たる意志を發動させる原因は寫象即ち純粹理性であるが故に、人間の本質が意志であるといふことは人間は實踐理性と共に

に純粹理性を具有してゐるといふことを意味するのである。尙一般人は理性的要素と感性的要素とを併有するが故に、その道徳的生活は不斷の精進奮闘努力である。そしてその結果純粹に理性的になつたものは「神聖的性格」である。併しこれは理想であつて、人間は永遠に完全な道徳的境地に到達することが出来ないものである。

道徳隨つてその動力たる實踐理性が自律的であるといふことは、やがて理性的存在としての人間が自律的たることを意味する。然るに、自律はやがて自己目的であるが故に、理性的存在としての人間が自律的であるといふことはやがて自己目的的存在であることを意味する。カントはこの道徳の主體としての自律的自己目的的存在を人格と呼んでゐる。即ち、彼にとつては人格と自律(自由)とは同一事の統一的方面と變化的方面との差であり、兩者の關係は相關的補合的である。隨つて彼から見れば、人格はあらゆる目的を統制する終極目的であつて、萬物は皆人格の手段となつてのみ價値を有するのである。彼が價値を尊嚴と價格、善と利又は目的價値人格價値と手段價値物質價値とに別ち、且目的價値人格價値を以て交換し得ないものとしたのはこれがためである。

人格が終極目的であるとするれば、それは善意の對象でなければならぬ。斯くして彼は、道徳律及び人格に對する畏敬を以て道徳の眞動機であるとすると共に、その定言命令に内容を附與して左の如くいつてゐる。曰く、「他人並に汝の人格に於て常に人間の尊嚴を尊重し、人格を常に目的として取扱ひ單に手段として取扱はぬやうに行動せよ。」と。斯くして彼は、善とは義務のために義務を行ふことであると共に、道徳律及び人格を畏敬する意志及び行爲であるに至つたのである。斯くして彼は、道徳は萬人に共通なもの即ち道徳は人をして人——人格たらしめる所以であるとするに至つたのである。併しながら、道徳も人格も存在でも與へられたものでもなくて理想であり常爲であるが故に、道徳を行ふにも人格となるにも努力が必要である。與へられたもの又は自然現實を統制し超越する努力が必要である。そして茲に彼が道徳觀上の二元論がある。實にカントの道徳觀は感性と理性・經驗的性格と睿智的性格・性向と義務・必然と常爲・現實と理想・快樂と克己・功利と良心・結果と動機・他律と自律等の對立を根本豫想條件とするものである。

自律は自由である。人間は自由體即ち自己立法者・創造者であるが故に自己の行爲に對して責

任をも義務をも感じ自ら道德の立法者・創造者ともなるのであり、随つて道德が存在するのである。然り、人は只自由によつてのみ現象界自然界を超越して本體界に入ることが出来るのであり、随つて自由のない所には道德がないのである。蓋し、道德は可能を實現する努力だからである。カントが、「汝は爲すべきが故に爲し得る」といつたのはこの意味である。そして彼が「汝は爲し得るが故に爲すべきである」といはなかつたのは、彼が理想主義者たることを證するものである。畢竟するに、彼にあつては、自由は道德の實在根據であると共に道德は自由の認識根據であり、随つて自由を他にして道德がないと同様に道德を離れて自由がないのである。然り、カントにとつては自由はやがて道德的自由であり、道德はやがて自由なる意志の作用である。カントの自由を以て心理的自由即ち放肆逸縱又は無法則無規律と思ふのは大なる謬見である。事實、彼は外的原因即ち時空の制約を受けないことを自由の消極的意義とし、自律即ち自己自身の法則に従ふこと又は行爲の格率が道德の法則に合致することをその積極的意義としてゐるのである。

自由は超越的先驗的なものであるが故に、經驗又は知識によつて分析又は説明することの出来ない終局原理である。經驗的立場又は自然科学的立場から見れば自由はない。自然的存在又は感

覺的存在即ち經驗的性格としての人間は時空や範疇の支配下にあり、随つて單に因果的必然的なものに過ぎない。只理性的存在否實踐理性の所有者又は超感覺的存在即ち人格又は睿智的性格としてのみ人間は自由である。自由(随つて超感覺的世界)は、存在するものではなくて要求し獲得し創造し信すべきものであり、認識すべきものではなくて思惟すべきものである。別言すれば、自由は道德の成立を可能ならしめる實踐理性の一基本^{ポスツラート}要求であり、一根本假定であり、随つて現象的認識論的概念ではなくて本體的形而上學的理念である。そして茲に形而上學が道德の基礎を必要とする根據が存するのである。尙茲にいふ「基本^{ポスツラート}要求」とは理性を基礎とした信仰即ち純理的信仰又は實踐的信仰の義である。

カントは自由を以て道德の成立を可能ならしめる根本的な基本^{ポスツラート}要求としたが、この以外に靈魂不滅と神の存在とを實踐理性の基本^{ポスツラート}要求として擧げ、且自由を道德律より導いたやうに、靈魂不滅と神とを至善の基本^{ポスツラート}要求として至善から導いてゐる。そして前述の如くカントに従へば、人間は感覺的存在であると共に超感覺的存在であり、且前者に於ては「福」が最高原理であり、後者に於ては「徳」が最高原理である。然るに、この兩面は枘鑿相容れないものであり、對角線的に相反

するものである。蓋し、福の淵源は經驗意志であり徳の淵源は純粹意志だからである。即ち兩者は斷じて論理的分析的に結合するものではない。而もこれは單なる理窟ではなくて否み難き事實である。随つて兩者の關係は、初めから結合することが出来ない^{と見るか}総合的に結合してゐると見るかの二つに一つを選ばなくてはならない。然るに、人間は本來統一體であり吾々の實踐理性は至善^{ヘクステラクト}の概念を要求し、且至善の概念は萬善の總括即ち最大善としての福と萬善の頂點即ち最高善^{ハイベルスグロート}としての徳を必然的要素として包含するものであるが故に、兩者を分離さして置くことが出来ないから、必ず総合的に結合するものと見なくてはならない。而も二つの相異なる概念が必然的に結合する時には、その關係は同一の關係でなくて因果の關係でなくてはならないと共に、因果の關係は只兩概念が經驗的な場合にのみ認識し得るものであるのに、福は經驗的概念であるけれども徳は經驗的概念ではないから、福德間の因果關係は認識し得ないのである。これカントの所謂「實踐理性の二律背反」である。斯くして、彼は止むなく、福は徳の原因ではないといふ理由から徳を福の原因として、即ち徳を福の上位に置いて兩者を統一しようとしたのである。而も經驗界に於ては福德の一致しない場合が尠くないから吾々はこれを経験以外の世界即ち靈の世

界に於ける永遠的向上精進の過程を通じてのみその完全な一致が可能であるとしなくてはならない。これカントが「靈魂の不滅」を以て實踐理性の第二基本要素とした所以である。

併しながら、單に靈魂の不滅だけで十分な福德の一致を期することは出来ない。蓋し、この世界の本性が福德の一致に反するものである時には、如何に靈魂が不滅であつても福德の一致を見る事が出来ないからである。別言すれば、この世界の根柢には自然的必然的な因果關係を統制する道德的秩序即ち感覺世界と超感覺世界とに共通する秩序の維持者たる神が存在してのみ福德の一致が可能だからである。これ彼が神を以て實踐理性の第三基本要素とする所以である。そして茲にカントの道德論と宗教論との橋梁がある。

斯くの如く、カントは神を實踐理性随つて道德の基本要素としてのみ論證し得るもので、神學に於ては不可能であるとしてゐると共に、神學は單に道德を基礎とするところの道德的神學としてのみ成立し得るものであり、宗教は理性の範圍内の宗教即ち理性教道德的宗教としてのみ成立し得るものであるとしてゐる。即ち彼に従へば、道德を行ふといふことを他にして宗教はなく、宗教そのものがやがて道德なのである。義務の遂行を中心とし、自由を根據とし、更に理性分内

の事象であるとする點に於ては道德も宗教も全然同一である。只道德は義務の遂行又は道德律の服従を理性の命令とし意志の動機とするのに對して宗教はこれを理性の必然的法則即ち神の命令とし信仰の對象とするのみである。随つて宗教の標準は道德である。事實、カントは信條も教會も皆道德的である限りに於てのみ有價值であるとしてゐる。

畢竟するに、カントの宗教觀は、道德觀に過ぎない。随つて彼の宗教觀には道德觀以外の特色長所がない。只彼が形而上學は認識的要求上のことではなくて實踐的要求上のことであるとし、意志又は信仰の上に新形而上學を建てた點は特筆に價する。そして斯くの如き道德的宗教觀は、神の中に絶對的善と絶對的實有とが共存するとしたプラトーンの哲學觀の面影を宿してゐると共に、當時の啓蒙時代の宗教又は理神論の反映である。因にカントの宗教觀は、『實踐理性批判』及び『單なる理性の限界内の宗教』(一七九三年出版)に徴して知ることが出来る。

五 藝術論の要旨

以上簡單ながらカント哲學の三大分野の中認識論及び道德論の要旨を叙述したから、更に進ん

でその最後の分野たる藝術論を檢覈することとする。本論に入るに先立つて一言するに、藝術論は上記二大分野の統一を目的とするものであり、随つて形式的には三大分野中最も重大な地位を占めるものであるにも係らず、その内容に於ては最も價値の劣つたものである。但しそれは他の二大分野と比較してのことであつて、これを他の藝術論と比較すれば依然として獨得の價値を有するものである。以下、順次その要旨を解説してカント哲學の真相を闡明する一助に供しようと思ふ。

既に述べたやうに、カントは一方に於てはヒュームの懷疑論に對抗して、「吾々は自然界に關して普遍的必然的な隨つて先天的な認識を有することが出来る」と説き、科學をば懷疑論の破壊的結果から救濟し、他方に於ては否定的獨斷說に對抗して、「吾々の理知即ち悟性は形而上學的對象に關して肯定の權能をも否定の權能を持つてゐない。只實踐理性の要求に基づいてのみ肯定する事が出来る、否肯定せざるを得ない」ものだとして道德宗教の根柢を堅固にしようとした。併しながらこの目的のために彼の哲學は頗るその統一を失つた。蓋し彼は現象と物自體とを峻別することによつて初めて先天的認識即ち普遍的必然的の認識が客觀界に關して成立することが出来る

るとし、可感界と可想界とを峻別することによつて初めて意志の自律自由といふこと、現象界が必然の理法に支配されるといふこととを兩立させることが出来るとしたが、而も必然的機械的の現象界と自由的的の本體界とは本來全く相異り相反する別世界だからである。随つて彼は當然この兩界が如何なる關係を有するかを考察しなくてはならない。即ちこの兩界は果して經驗界と可想界及び必然と自由との反對を以て終局するかといふ問題を解決しなくてはならない。そして茲に第三批判即ち『判斷力批判』(一七九〇年出版)の職能と價值とがある。實に『判斷力批判』の職能と價值とは、認識の素材の根柢に存する所のものは吾々がその素材を按配するために用ふる形式を規定するものと同一であるかも知れないし、又物質現象の根柢に存する所のものは心意現象の根柢に存するものと同一であるかも知れないといふ『純粹理性批判』の暗示に一步を進めて、前記兩界が矛盾反對するものではなくてその根柢に於ては同一であるといふことを闡明したところに存するのである。然らば彼は如何にしてこの二元の統一を敢てしたであらうか。

カントに従へば認識は對比的のもので反對の差別を豫想するものである。随つて必然と自由と

を統一する一元的原理そのものは吾々の認識を超越するものである。斯くして彼は後の同一哲學者の如く唯一の形而上學的絕對をこの統一原理として假定する企には出でないで、寧ろ只この統一を暗示するやうな事實をば自然界中に求めようとしたのである。その結果として發見したものが即ち「自然に於ける^{フウエックメイスイロカイト}合^{フウエックメイスイロカイト}的^{フウエックメイスイロカイト}性」の具體化としての「美的對象」と「有機體」とである。斯くして『判斷力批判』は美學及び目的論自然意匠論又は有機體論の二部に別れることとなるのである。そしてこの兩部を一貫するものは、美的對象に於ても有機體に於ても、全自然界の根柢となつてそれに絕對的統一を附與する感官以上の普遍的必然的存在者があるといふ一元論的思想である。然らば彼が件の一元論的思想の原理としたものは何であるか。いふまでもなくそれは「判斷力」そのものである。

純粹理性は知(悟性)であり、實踐理性は意(理性)であるのに對して、判斷力は情である。そして情は知と意とを總統一するものである。即ち情は對立の觀念を豫想し且これを總合する力であり、特殊を普遍に偶し、經驗的多を超越の一に偶する力であるが、而も件の總合は直接に快苦の情として、詳しくはその對象が主觀の目的に適するか否かとして現はれる點に於て、意に於

ける総合が利害として現れるのとその趣を異にするのである。この意味に於て、判断力は意匠的
 目的的に事實を判断する力、即ち是認力ビリグンクスカラフトであり美的判断力である。更に理性は原理を與へ悟性
 は對象を與ふるものであるが故に、兩者の總合力統一力としての判断力は原理を對象に應用する
 ことを完成する力であるといはなくてはならない。事實「自然を目的に適合したものと判断する
 ことは先天的に可能であるか」といふ「判断力批判」の問題は、實踐理性の範疇を純粹理性の對
 象に應用したものに過ぎないのである。

さて、カントが判断力を總合力統一力とした根據は、彼の判断観にある。即ち彼に従へば價值
 判断はすべて総合的である。價值判断たとへば快・利・美・善等の賓辭は主辭から分析することが
 出来ないからである。別言すれば價值判断は一個の目的に關して對象の價值を現すものであり、
 随つて常に目的に適合するか否かに關し、對象を目的の下位に従屬せしめるものだからである。
 尙、判断が快苦の情として現れるのは、對象の形式と觀照の作用とが調和するか否かと判断だか
 らである。これを他而より見れば判断には規定的のものと反省的のものとがある。規定的判断と
 は、形式論理の法則に従ひ對象を普遍的概念によつて決定するもの、即ち既に與へられた普遍に

屬するものとして個物を見るもので、純粹に理論的のものであり、随つて批判を要しないもので
 ある。これに對して反省的判断とはその総合が對象を一目的に下屬せしめることを意味するもの、
 即ち與へられた個物を置くべき普遍を求めるもので、情意的のものであり、靜觀的のものであり
 觀察である。そして後者はそれが自然を主觀に對して目的に適合したものと判断すれば美的（感
 覺的）判断となり、それが自然自身が目的に適合したものと判断すれば狹義の目的觀的判断とな
 る。別言すれば自然の合的性を理會する際に主觀的態度を取つて、對象の觀念を形成する以前に
 直接に快苦を感じる時には美的判断となり、客觀的態度を取つて快苦を感じる以前に直接に對象
 の概念を形成する時には目的觀的判断となるのである。これ即ち「判断力批判」が二部に分れなく
 てはならない理由である。

先づ、カントの美的判断に關する見解から檢するに、彼は、美的判断を以て全然主觀的のもの
 と解してゐる。即ち美的判断は客觀的事物そのもの、具へてゐる性質を現すものではなくて、吾
 々の主觀即ち趣味の感ずる快感を現すものである。只美的判断が單なる官能的快感と異なるのは、
 その判断が普遍的なことである。そして美的判断即ち趣味判断の普遍性は、目的を脱離すること

から生ずるのである。主観的(にして形式的)なこと、普遍的なこと、は矛盾しないと見るのが、彼の哲學を一貫する獨得の見解である。尚趣味とは事物を美的に判断する能力で、一切の關心を離れ、單に快苦の標準から事象を評價する能力である。

美的判断が主観的であるといふことは、やがて美が主観的であることを意味する。即ちカントに従へば美的感情であるが故に、美と感ずるものにとつてのみ美が存在するのである。随つて美は觀照されるけれども考察されないし、直下に判断されるけれども規定されない。感ずることは出来るけれども證明することは出来ない。美が主観的であるといふことは、美は無關心であるといふことを意味する。謂ふ所の關心とは事物の實在といふ觀念と結合して起る官能的快感である。随つて美が無關心であるといふことは、美は美即ち對象の形式が美的能力の作用に合致すること以外の何ものをも目的としないといふことであるが故に、美の内容的標準又は意識的標準がなく、美に關する客観的の法則を立てることも理説を組織することも出来ない。只趣味の判断即ち美的判断の先天的妥當性に關する研究がある許りである。美學は美的判断の動力を研究するものであつて、その出發點は認識及び欲望の場合と同様に、この動力の批判でなくてはならない。

これ彼が自己の美學を『判断力批判』と呼んだ所以に他ならない。そして美學を判断力即ち情及びその作用たる美的判断即ち感情判断の研究であるとする點に於て、彼の美學は感情的美學である。

美が無關心であるといふことは、美は對象の觀念に對する純粹な適合であつてその對象が客観的に存在すると否とは問はないし、随つて純粹の美はその判断が單に無意味の形式に限られた場合のみに存するもので、そこには禍福も努力もなく只想像力・直觀力に於ける遊戯即ち自由な觀照があるのみであるといふことを意味する。これと共に美が無關心であるといふことは、美は單なる快とも善とも趣を異にすることを意味する。蓋し快は快感を興奮せしめる現象の物質的現在を假定するものであり、善は道德的目的を意志及び行爲に於て實現することに關するものである點に於て、等しく關心的事象だからである。更に先天的である點に於て美と善とは同一であるが、美は目的概念なくして目的に合するものであるのに對して、善は道德法に現れた目的規範に適合するものである點に於て別異であり、美と快とは直接の印象である點に於てその揆を一にするが、美は普遍的必然的合目的であるのに對して快は個人的偶然的合目的である點に於てその揆

を異にする。

前述の如く、美は形式的のものであるが故に、美的判断中に存する先天的總合の根源は件の形式の中に求めなくてはならない。美感は、想像力が感性及び悟性を調和的に共働させて知覚する對象に生ずるものであり、そして件の對象の寫象する形式的原理に於ける關係の根柢は單に個人的活動のみに存するものではなくて、意識一般に存するものであり、随つて對象の合的性の感情は論證することは出来ないが、而も一般に傳達することが出来るのである。茲に美的判断の先天性の一證がある。

美は(主觀的のものであると共に)形式的のものであるが故に色・聲・香・味等の感覺に結合する種類の快感は美ではないと共に、事物の内的價值又は本質を指示するものは形式美が自由美であるのに對して從屬美であり、從つてそれは單に形式ばかりでなく形式と内容との間にも亦調和がなくてはならない。裝飾・花樹・風景その他動物以外の自然物の美は自由美であり、自然美の最も高尚なもの及び藝術は從屬美である。尙彼に從へば、「形式」とは、概念の媒介に依らず又目的觀念を思ひ浮べることなくして目的に適合するものである。斯くして彼は「只その形式のみによ

つて利害の觀念に結合されない快感を普遍的必然的に吾々に與へるものが美なる觀念である」と定義してゐる。畢竟するに、彼に從へば、美の美たる所以は、目的なく意圖なくして而も目的に適ひ、無關心にして而も關心せしめる所に存するのである。

カントの美論は、以上の如くその出發點が主觀的であるにも係らず、その内容に於ては自然に於ける優美と壯美との説明を主としてゐる。即ち彼は上記の區別の外、美を優美と壯美とに別けてゐる。優美は美の代表者であつて無關心的快感の目的であり、感性と悟性との調和によつて實現されるものである。これに對して壯美は、感性に對する理性の勝利を意味し、一切の障害を排して幕進する際に成立するもので、不適合の苦感によつて實現され、強大と失望不満足の苦感と自己反省とを伴ふ點に於て道德に密接な關係を有するものである。壯美は性質・關係・様相の三點から見れば、全然優美と一致するけれども、單りその分量の點に於て異つてゐる。即ち優美は一定の形式を有するけれども壯美は形式を超越して活潑潑地に活動するが故に一定の限界がない。随つて優美は質であるのに對して壯美は量であり、優美の快感は直接的であるのに對して壯美の快感は間接的であり、優美は積極的であるのに對して壯美は消極的である。尙壯美は數量的壯美

と活動的壯美とに別つことが出来る。

更にカントの見る所によれば、自然は一方それ自身の法則に従つて活動しつゝ他方吾々の精神をして無關心的快感を起さしめるものである。この事實は自然が單に機械であるばかりでなく精神の目的に關係を有することを暗示するものである。藝術品は人工であると共に自然物である。自然美は美しいものであり、藝術美は一物を美しく想念したものであり、隨つて意識的意圖的なものである。斯くして彼は自然美を最も尙びながら尙藝術美隨つて藝術の價値を認めた。曰く「藝術の長所は自然の有様其儘では醜いものも美しく表現し得る所に存する。藝術によつて美しく表現し得ないものは只嘔吐を催すものである。藝術に於ては人爲と自然とが相合したといふことが出来る。そしてその藝術に於ける自然は天才から來るのみである。」と。斯くして彼は天才を重視してゐる。そして彼に従へば、天才は個物に普遍性永遠性を與へ現實より理想を生む創造力の卓越したもので、法則又は規矩準繩を超越し無意即ち彼の本質を自然に流露して優美な原型的模範的作品を製作するものである。即ち天才は藝術に於て自由と必然とを合一することによつて自由界目的界と必然界自然界とがその根柢に於て同一であることを示現するものである。彼曰

く「天才は自然の如く働く精神である。」と。

次にカントの自然又は有機體に關する見解について見るに、彼に従へば吾々の悟性は自然を分析的機械的に理會せんとするものであるが、而も有機體に至つてはこれを機械的に解することは出来ない。隨つて意匠の概念を導いて來て、全體を目的と見部分を手段と見て意匠的にこれを説明する他はない。カントはこの意匠的判斷を考察法と呼んでゐる。そしてこの見地から見れば有機體の特色は、單に全體が部分から成立つてゐるばかりではなくて部分も亦全體によつて生ぜられ保存されるといふことである。隨つて有機體の成立を理會せんとするには、必ず全體は部分に先立つて存在し且その發達を促進し決定するものであり、且部分は合的性を有し隨つて全體は合的的體系を成すものであると考へなくてはならない。然るに機械の見地から見れば、有機體は經驗界の奇蹟であり、隨つて機械的説明を捨てゝ意匠的説明をすることは、自然哲學又は自然科学としては矛盾であり、學的認識としては不可能であるが、而も吾々の精神は意匠的説明を要求するのである。そしてこれは矛盾ではない。即ち有機體に於ては意匠觀と機械觀・自由觀と必然觀とは矛盾するものではなくて並存し得るものである。只自然の形式のみを對象とする悟性から見

れば兩者を峻別することが出来るが、神知の如き卓越した知的直観から見れば兩者はやがて同一のものであるかも知れないから、悟性的見地から獨斷的に見て意匠論のみを妥當とするのは誤謬である。要するに、カントはその目的觀に於て、自然界に於ける特殊性及びその全體としての經驗の體系を通して客觀的合的性を明かにしようとしたのである。

六 教育論の要旨

カント哲學の要旨は大體以上で盡きてゐるが、本誌の讀者諸君の大部分が教育者であるから、茲に彼の教育論の要旨を叙述して本論の不備を補ふ一助に供することゝある。

カントの著述中には特に教育を論じたものはない。今日カントの教育論として傳へられてゐるのは彼の弟子リンクがカントの講義の草稿を編纂して千八百三年（カント死亡前一年）に公にしたのを、千八百七十四年にウィルマン千八百七十八年にフォグトが訂正して出版したものであり、自らその論議中には眞偽の疑はしい點も尠くないが、大體に於て彼の教育論として信用し得るものであることは諸家の定説であるから、以下その大要を述べることゝする。尙カントの教育論は

カント哲學中最も價値の少いものであることはいふまでもない。

さてカントに従へば、人間は生物の中で教育を必要とする唯一のものであり、そして人間は唯人間によつてのみ人間となることの出来るものである。即ち人間は教育を受けなければ動物性のみ發達して人間の本性たる理性は萎縮するのである。彼のこの見解は、彼の二元論的人性觀を根據とするものである。即ち彼に従へば人性は現象と本體の両面から見ることが出来る。現象としての人間は、自然の法則に従ふ必然的のもの即ち彼の所謂獸性的存在であり、本體としての人間は、自然の法則を超越してこれを統制する自由的なもの即ち彼の所謂理性的又は叡智的存在である。教育の必要と可能との根據は、後者を以て前者を統制すること即ち「自然性の理性化」に存するのである。事實彼は教育を以て件の自然性を開發成就することであるとしてゐるのである。そしてこの點から見れば、彼の教育觀は個人主義の如くに思はれるが決してさうではない。蓋し彼は他方に於て、教育を以て全人類的事象であると共に、永遠的事象であると見てゐるからである。即ち彼に従へば人間の本性は不斷無限の進歩體であり隨つて人性は永遠に完成されるものではない。そしてその永遠に完成されないが而も不斷に進歩する人性を幾分でも完全に近づけるも

のが教育である。随つて教育は單に一時代の事象ではなくて永遠的事象である。更にこれを個人
の方面に就いて見るに、個人はこの人類の永遠的進歩に寄與貢獻してのみ眞に價値ある人間即ち
謂ふ所の「人格」となることが出來ると共に、人類の永遠的進歩に寄與貢獻するには、先づその
心性を開發陶冶すること即ち自然性を理性化することを要するが、而もそれは只社會や團體又は
人類や種族の中に於てのみ可能である。斯くして彼は教育を以て人類の解決すべき最難最大の間
題であるとするに至つたのである。

彼は教育を保育・訓練・教導の三つに別つてゐる。保育とは兒童をしてその性能を有害に使用さ
せないために爲す所の父母の注意及び幫助であり、訓練とは人性中の動物的のものを排除するた
めの消極的作用であり、教導とはその積極的作用である。そして訓練が三者中最も重要な地位を
占めるのである。更に彼は作業を課し、且問題法を用ゐて兒童の心性を啓發し、強迫によつて
はなく理性の自律によつて徳を行はしめ、衛生上の知識を與へると共に身體を鍛練することによ
つて身體を發育せしめることを以て教育法の要點であり、そしてこれらの點から見れば、諸多の
教科中數學・遊戯・體操・宗教科等は特に重要なものであるとしてゐる。最後に、彼は教育の時期は

大凡十六歳までとあると共に、自ら教育されたものゝみ能く他人を教育することが出來るとして
ゐる。

人及び哲學者としてのカント

——「上なる星燦め、蒼穹と内なる道德律」(カント)——

大哲カント生れて二百年、幾多の迂餘曲折を経て新カント派の全盛を見るに至つた今日、この哲人の生誕二百年記念祭を舉げることは、哲學學徒にとつてかなりに意義あることでなくてはならない。

苟くも相當の教養ある現代人にして大哲カントの名を知らぬものはあるまい。殊に、哲學とか倫理とか教育とか藝術とか宗教とかを研究するものは、カントの思想學説を理會することなしには研究の歩武を進め得ないのである。随つて、カントの思想學説は比較的一般に知れ亘つてゐるのに反して、彼の人の人となりについては割合に知られてゐないのは、私の聊か遺憾とするところである。哲學は哲人の人格を離れては存在も理會も不可能だからである。彼を尊敬する私が、茲に彼の傳記と人格とに關する短き一文を認めて、この大哲の生誕二百年を記念するよすがの一つと

することは、必ずしも無意義な企ではあるまい。

二

インマヌエル・カントは、西歷一千七百二十四年四月二十二日、獨逸プロイセンの首府コエーニヒスベルヒ市に於て貧しい馬具用皮革及び鞍製造人ヨハン・ゲオルヒ・カントの第四子として呱呱の聲を擧げた。コエーニヒスベルヒ市は、伯林の東方約三百六十哩(汽車で約十時間)露領を去る西方約百哩に位する人口五萬(今日は二十萬)の小都市で、大學を有してゐた。カントの血統はスコットランド種であつて、十七・八世紀の間に彼の祖父がプロシアに移住したらしい。母は敬虔で聰明な人であつたが、神學者のシュルツを崇拜してゐたので、カントもその感化を受けるやうになつた。そして兩親共に信仰が厚く、且當時勢力のあつた敬虔派(ピエタス派)(ルーテル派に反して眞のルーテルに復歸することを旨とした教派)の信徒であつた。カントの兄弟は九人(男二人・女七人)あつたが多くは夭折して、後年まで生き残つたものは十一年若い弟(後に僧となり、且カントの大學教育を受けた。)と末子の妹(後に職人の妻となつた。)とだけであつた。彼の家が如何に貧しかつたかは、彼の二人の妹が若い時に女中奉公をしたことに徴しても、推知することが出来る。

母は、カントが十四歳（一七三七年）の時にこの世を去り、父は彼が二十三歳の時に亡くなった。両親の性情や生活は彼に大きな影響を與へたらしい。彼は孝心が篤かった。

カントは、九歳から十六歳迄フリードリッヒ學校（コレギウム・フレデリキアム）で小學と中學との課程を修めた。校長は前記のフランツ・アルベルト・シュルツであったが、この人は敬虔主義とウオルフ學派との中間又は保守と進歩との中間に立つ人で、カントは母と共にその感化を受けることが少くなかつた。この學校に在學中は少しも目に立たず、只古典殊にラテン文學を愛好し且これを専攻することを友人に宣言してゐただけであつた。十七歳（一七四〇年フリードリッヒ・ウイールヘルム二世即位の年）の時に哲學及び數學の研究生として土地の大學に入り、二十二歳（一七四五年）の時に卒業した。在學中は、學資が缺乏したので人に教授して金をまうけると共に母方の叔父から補助を受けなければならなかつた。はじめは牧師を志望して熱心に神學を勉強したが、學資缺乏のために缺席勝であつたので、次第にこれに對する興味を失ひ、却つて物理學を専攻するやうになり、やがて後には有名な所謂星霧說即ちカント・ラプラス説を主張するに至つた。尙カントが學生時代の大學の科目は、希伯語・數學・希臘語・論理學及び形而上學・實踐

哲學・自然科學・詩學・雄辯學及び歴史であつた（各講座には教授一人助教一人）が、彼が何を修學したかは推して知るべきである。カントがこの大學で最も深い感化を受けたのは、少壯講師のクヌッツェンであつた。彼は、シュルツの弟子で、ウオルフの説と敬虔主義とを調和し且英國自然神教派に反して基督教を辯護し、自然哲學はニュートンを祖述してゐた。カントはこの人によつてウオルフやニュートンを知るに至つた。カント後年の學風もこの人に負ふ所が少くない。尙この大學の哲學は當時の正統たるライプニッツ及びヴォルフの哲學であつた。

カントは、大學卒業の翌年（父を喪つた年）から足かけ九箇年（自一七四七—五五年）の間三つの豪族に家庭教師として傭はれ、カイゼルリング伯爵夫人からは特に厚遇を受けたが、彼は、家庭教師としては教育法が拙劣で評判がよくなかつた。三十一歳（一七五五年）の時に自然科學に關する論文を提出して學位を獲ると共に母校の私講師となつたが、その翌年（一七五六年）から所謂七年戦争が始つたので教授となることが出來ず、十五箇年の長い間私講師の地位に逼塞するの止むなきに至つた。併し、講義が好評であり随つて聽講學生も多かつたので、収入は（勿論十分とはいへないが）相當にあつた。其中四十二歳（一七六六年）の時に、圖書館の副長を兼

ねて年金六十二ターラーを給與されるに至つてはじめて安樂な生活を營むことが出来た。その間カントは、幾度も他の大學（エルランゲン・イエナ・ハツレ等）から教授に招聘されたが固辭して動かなかつた。而も教授の椅子は二度まで取り損じ、フリードリツヒ大王の知遇によつて漸く四十六歳（一七七〇年）の時に論理學及び形而上學に關する論文を提出して教授となることが出来たが、（講師中は科學の研究に主力を注いでゐた。）教授となつてからは内外の信任が厚く待遇も良かった。そして彼の講じたものは、論理學・形而上學・數學・物理學・地文（理）學・人性學・法理學・倫理學・自然神學・自然法・教育學であり、就中論理學・數學・地文（理）學を主とした。その中地文（理）學はカントによつて始められた新講座であつた。以上の講義科目を見れば、カントの講義は、歴史哲學を除くだけで、當時の所謂「哲學」の全野に亘つてをり、隨つてその感化影響が頗る大であつた。彼の博學は只々驚歎の他はない。千七百八十年代（即ち五十六歳から六十六歳）までは著述の時期であつて、その不朽の大著たる『純粹理性批判』は實に彼が五十七歳（一七八一年）の時の著である。そしてこの點から見れば、カントは寧ろ晩熟の人であるといはなくてはならない。

七十二歳（一七九六年七月）の時に、老衰の故に彼は教職を辭して靜に老後を送つてゐたが、千八百四年の二月十二日に八十歳の高齡を以てこの世を去つた。カントは若い中二度結婚の機を失つたために終生獨身で過し、妹の子を養つて嗣としてゐた。

カントの墓銘は、「上なる星燦めく蒼穹と内なる道德律」といふ『純粹理性批判』中の一句であるが、これは實にカントの思想の兩端を示すものである。著書は全體で二十三部あるが、前記『純粹理性批判』がその最大代表作である。

三

カントは、眞率・中庸・温厚・快活・親切な人であり、且義務を重んじ、獨立心に富んでゐた。身體は矮少鳩胸、加ふるに肺や心臟が壓迫され、且病身であつたが、終生飲食をはじめあらゆる攝生に注意してゐたので能く八十歳の長壽を保つことが出来た。否、彼は單にその肉體の健康を修養努力によつて保持増進したばかりではなくて、その精神や人格もまた修養努力によつて鍛鍊し成長させたのである。彼は單に思想上の主意主義者であつたばかりではなくて、實行上の主意主義者でもあつた。即ち、彼は、凡てを意志—合理的意志によつて統制した人である。この意味に

於て、彼の偉大は天稟の偉大ではなくて寧ろ努力によつて創造した偉大である。更に彼は、この點に於て、ソークラテスと同じくルソーと殆ど正反對するものであるが、而も彼にはソークラテスに見るやうな一脈の俠氣と情熱と覇氣とヒロイズムとが缺けてゐる。結局彼は學者である。そして茲に彼が八十歳の長生涯を平和に過し得た所以がある。

斯くの如く、カントは、一面に於て「強意の人」であつたと共に、他面に於て極めて敬虔な人であり信仰の深い人であつた。彼は、「道德律—無上命法」の聲を斷えず心内に聞いてゐる點に於て意志の人であり、「星燦めく蒼穹」を常に仰いでゐる點に於て信仰の人であつた。随つて彼を通例の意味に於て「意志の人」と見るのは斷じて誤りである。事實、彼が「情の人」であり、涙脆き神経質の人であつたことは、彼がアカデミー時代には文學を専攻しようとしたり、大學入學の當時には牧師を志望したことや、或は、大學の開講演說の際に聴衆が案外多かつたのに喫驚狼狽したことや、或は、情の人ルソーを尊敬して、自己の居室を彼の肖像で飾つたばかりでなく、その『エミール』を手にしたために多年の慣習を破つたことや、或は、鶏の鳴聲がうるさいなどといつて度々轉居したことや、更に、「純粹理性批判」後の一切の著述が訂正又訂正の連続であつた

ことなきに徴して明かである。實に彼は、修養の人努力の人といふ意味に於てのみ「意志の人」といふことが出来るのである。

然り、彼の生涯は一面から見れば不斷の自己征服史であり奮闘力争史である。随つて、彼を目して冷たい理知一片の人と見るのは誤りであると共に、彼の思想學說を以て文字通に彼の性格と一致するものとするのも亦不當である。彼の思想も人格も生活も皆等しく彼の自覺的努力の産物であり彼自身の創造である。

四

カントの生活振は古い型に屬し、且單調で規則的であつた。規定の日程は最も嚴格に遵守して、ルソーの『エミール』に讀み耽つたために二三日間だけ散歩を廢した時（一七六二年三十八歳）の他は一度も破らなかつた。即ち毎日、午前五時に起床し、朝食後七時から午後一時まで仕事（講義著述）をし、一時に晝食を認めて四時まで會談し、四時半に散歩（一時間）に出で、夜は讀書に費し、十時に就床した。中でもカントの散歩は最も規則正しいもので、市民はこれを「哲學者の散歩」と稱し、詩人ハイネは「コエーニヒスベルヒの善良な市民たちは彼の散歩によつて時計を合

した」と評した程であつた。又彼が多年働いてゐた召使が暇を取る時に、「この召使は毎朝必ず五時に起して呉れて非常に感心なものである」といふ證明書を與へたことによつても、彼が如何に規則正しい生活を好んだかといふことを理會することが出来る。

カントは自分の家で讀書するのが好きで、一度も旅行したことがなく、家庭教師として只一度近村の豪族の所に住んでゐた以外は終生コーニヒスベルヒの町を一步も出ずにしまつた。併しながら、内外の地理には非常に精通し、旅行記や風土記を廣汎に且精密に研究したので、諸國の風俗人情なごにも精通してゐた。嘗て一英人と會見した時に、談偶テームズ河橋のことに及んだ所が、その構造についてのカントの精細明確な知識は、その英人をして舌を卷かせたばかりか、カントは必ず工學者で且幾度もテームズ河橋を實見したことがあるものと思はしめた程であつた。カントが如何に博覽強記の人であり、又緻密な頭腦の持主であつたかは、この一事に徴しても明かである。尙、前に述べたやうに、地文(理)學の講座はカントのために初めて設けられたものであり、且最も好評のあつた講座であつたにも係らず、彼は一度も山を見たことがなく、又僅數時間で行くことの出来る海すら見たことがなかつた。

カントの交際は勿論狭かつたが而も好んで客を招待して晚餐を共にした。そして會合の人数は三人(美の神グースの數)より少からず九人(美の神ミューズの數)より多からざることを限度とした。教職を辭してからは彼を見んとするものが門前市をなした程であつた。彼は、親しみ易く且滑稽に富み、無智無學の人とも歡んで交際し、その談柄は哲學を避けて専ら政治上のものを選んだ。彼が親交を結んだものには英國の商人が多かつた。その中にグリーンといふコエ市在住の英商人があつたが、時間を嚴守することはカント以上であつた。或日カントと一緒に散歩に出る約束をしたので、約束の時間の十五分前に馬車を用意し、十分前に服裝を整へ五分前に帽子を冠り、丁度約束の時間に馬車を驅けさせ、二三分遅れて來たカントを置き去りにしてしまつた。カントはこのグリーンと米國革命のことで議論をした結果なぐり合ひをして一時絶交したが、仲直り後は交情が一層親密となり、毎土曜日には二人で暮らすのを習ひとし、更にカントは自分の著述を「グリーン」の著述」とさへ呼んでゐた程であつた。因に、カントの政治上の意見は極端な自由主義で、北米の獨立戰爭及び佛國革命には同情を表してゐたが、實際政治に對しては極めて從順であつたことは、千七百九十三年(七十二歳の時)「理性の限界内の宗教」を公にしたために

政府より宗教に關する發言を拘束されたのに對して従順に服従したことに徴しても明かである。

カントは、大學では、はじめ毎日四時間乃至五時間宛授業した後二時間宛となつた。時間を守ることは實に嚴正で、ヤハマといふ人は九箇年間カントの講義を聞いたが、その間、カントは只の一時間の缺席もなく又十五分と遅刻したことがなかつたとのことである。講義は明晰透徹、交ふるに滑稽諧謔を以てしたので、學生は非常に喜んだとのことである。親しく彼の講義を聞いた詩人ヘルデルは、彼の講義振を推稱して、「カントの講義は極めて思想に富み、而も交ふるに滑稽を以てしてゐるので、有益であると共に興味がある。」といつてゐる。就中、地文(理)學の講義は最も評判が好く、聽講者には學生以外露西亞の士官をはじめいろ／＼な人が交り、親しく聽講の出来ない遠隔の人は、聽講者のノートを借りて讀み、プロシアの宰相ツェードリッツの如きはカントの地文(理)學の講義の面白いことを傳聞したので、人を派して彼の講義を筆記させ、そのノートを讀んで見て大に興趣を感じたが、脱漏の箇所があつたので、特にカントに送つてそのノートの誤謬及び不足の訂補を乞うた(カントはこれに應じた)程であつた。尙カントは、大學に於ては學生に只知識を授けるばかりでなく、更にその道德心及び宗教心を堅固にすることにも心を

用ゐ、大學の講義と一般の著作とを區別した。即ち大學の講義は考究的批判的であつた。彼曰く、「哲學は學ぶことは出来ない。學ぶことが出来るのは只哲學することのみである。學び得る哲學は歴史的のもののみであつて眞の哲學ではない。」と。そして又彼は學生に對して親切であつた。

カントは、前に述べたやうに、精細な思索力を具へてゐると共に、鋭明な批判力をも具へてゐるために、定義・判別・演繹を好み且それに長じてゐた。加ふるに、彼は博覽強記(殊に地文學・人類學に於て然り)であつた。彼は思想上の貴族主義者で、自らを持すること極めて高く、他人の思想に對して寛容な態度を取ることが出来なかつた。彼が私交際に於て哲學を話柄としなかつたのは、彼が哲學に於ては人を教へるだけで人から學ぶ必要がないと確信してゐたためである。随つて彼は他人の著述を客觀的に研究することが比較的少なく、自ら歴史的素養が比較的貧弱であつた。彼がヒュームを誤解したのも蓋しこれがためである。勿論、彼は相當に古今の學說には通曉してゐるが、只その目的がその缺點を發見し非難して自説の價值を立證發揮する方便に供することにあつたために、その長所眞價をも看過し貶視しがちであり、随つて、その批判が幾分辛辣苛烈に過ぎて公平親切に缺けてゐた。彼がその創見を弟子にすら秘してゐたのもやがてこれが

ためである。

カントは晩熟の人としては、その著述が多い方である。そして二十三種の全著作の中代表的なものは、『純粹理性批判』（一七八一年）、『哲學序説』（一七八三年）、『道德哲學原論』（一七八五年）、『實踐理性批判』（一七八八年）、『判斷力批判』（一七九〇年）、『道德哲學』（一七九七年）の六種である。そしてその處女作は、千七百四十五年（二十二歳）に認めた『活力眞測定考』といふ大學の卒業論文であるが、その出版（一七四九年）費の大部分は鞍尾をしてゐる彼の叔父が負擔した。

初期の著作及び小篇は、藝術的で、暗示や諧謔に富み、随つて興味に充ちてゐるが、前記の大作は何れも措辭は細緻精確、文章は乾燥無味、形式は整然單調、加ふるに思想は深遠複雑、調子は清純嚴肅であるが故に、翻譯に困難を感じる。カントの哲學が容易く一般に普及しないのは、勿論主としてその内容が深遠なためではあるが、その形式又は文章に缺陷があることも亦少くともその一因でなくてはならない。

五

哲學者としてのカントの生命は、偉大なる綜合者たり統一者たり集成者たることにある。そして

この點に於て、彼と匹敵し得る思想家は、只アリストテレス及びゲーテの二人あるのみである。別言すれば、彼の長所は、在來の對立的哲學思想を比較研究して其の長短を闡明し、且兩者の短を捨てて長を探り、以て彼獨自の新哲學を創建したところにある。在來の極端な一面的哲學の共通點統一點を發見し、且それを出發點として一層包括的な一層全體的な新哲學を創建し、以て在來の一面的哲學に新生命を附與し、それらの價值職能を十分に且正當に發揮せしめ、斯くして哲學をしてその具ふべき條件及び形式體系を完備せしめたところに存する。過去のあらゆる異説を綜合しながら、單なる調和折衷に墮しないで、獨得の新哲學を創建したところに存する。部分に於て全體を見、個體に於て普遍を見、刹那に於て永遠を見、皮相に於て根柢を見、末流に於て本源を見、分裂に於て統一を見ることの出来る卓越した力、即ち優秀な批判力を稟有し、且これを最も有効に活用したところに存する。この點から見れば、彼が、自らの哲學を「批判哲學」と稱したのは、眞に自らを知るものといはなくてはならない。

批判は破壊に即する建設であり、否定に即する肯定であり、理會に即する超越である點に於て、正しく一個の創造—消極的創造である。随つてカントが卓越した批判力を稟有してゐるといふこ

とはやがて卓越した創造力を稟有してゐるといふことである。只彼は先づ主としてこの創造力を消極的間接的に活用したために、即ち既存の價値の否定破壊に即して發揮したがために、所謂「批判力」となつて現れたのである。事實、カントは何よりも先づ徹底的な懷疑者であつた。あらゆる價値を疑ふことから出發したと稱せられるデカルトも、「我思ふ」ことそのことの眞實又は本有觀念そのものの眞實を容易く肯定する點に於て、未だ十分に懷疑の井底を掘り悉してはゐなかつた。彼によつて獨斷の眠から醒されたカント自ら感謝するヒュームすら、「懷疑」そのものの本性については何等透徹した理會を持つてゐなかつた點に於て、依然として一個の獨斷論者に過ぎなかつた。然るにカントは、デカルトの自明としたもの及びヒュームの疑はなかつたものにも鋭い懷疑の眼を注ぐと共に、その懷疑の暗雲を一掃して眞に「自明」なもの眞に「疑ふ」べからざるものを發見したのである。随つて彼の懷疑はやがて自覺である。然り、カントは最も偉大なる自覺者であり、カントの哲學は最も偉大なる自覺の哲學である。哲學が「自覺の學」であるといふことは、ソークラテスが道破して以來多年の間一個自明の定義とされてゐたが、カントの哲學程眞にこの定義にふさはしいものは、古今東西を通じて一つもないのである。蓋し、カント

哲學の實質的生命は、嚴密な意味に於ける自覺の主體としての「我」を發見したところに存するからである。即ち、我又は主觀の立場から萬象を照觀することによつて、哲學に所謂「コペルニクスの轉向」を與へた所に、カント哲學の眞價が存するからである。

カントは眞に信ぜんがために先づ疑ひ、眞に肯定せんがために先づ否定し、眞に建設せんがために先づ破壊し、眞に綜合せんがために先づ分析した。彼の批判は内在的超越である。随つて、一度カントが批判の素材となり對象となつたものは、表面的には否定破壊の非運に遭遇したやうに思はれるものでも、實際的には必ず一層大きな一層優れた思想・學說・體系中に最も有効に活用されてゐるのである。事實、カントが「獨斷論」の稱呼の下に一擲した過去の哲學も、或は空に近いものとして排斥したウォルフ等啓蒙學者の理知・客觀も、彼自ら悟性的認識の範圍を超越するとして否定した實有・神・自由意志・靈魂不滅・福德一致等の思想も、遂には凡て皆眞理として彼の哲學體系中に起死回生させたではないか。

再びいふ。カントの哲學者としての最大功績は「我」の發見と活用とにある。カントはこれによつて、一方、知識の本質を闡明し、以て哲學に確乎たる認識論的基礎を附與したと共に、他方、

人格即ち道徳の本質を闡明し、以て人間乃至人生の價値を高上させたのである。カント哲學を以て單なる認識論哲學と見たり、偏にその認識論的方面のみを繼紹しながらカントの正後繼者を以て任じたりとするのは、等しく誤りである。これ私が、現代殊に、我が國の新カント派の一部に對して憤焉を感じる所以である。眞にカント哲學を活かさうとするものは、須らく先づその眞精神を味解體得し、その全體を把握大觀しなくてはならない。

六

カントが集成者であるといふことは、やがてカントが先人の感化影響を受けてゐることを意味する。事實、カントをして所謂「獨斷の眼から醒して」批判哲學に第一指は染めさせたのはヒュームである。彼をして「情意の優越性」を理會せしめ、彼に主觀及び人の價値を暗示することによつて、既にヒュームのために覺醒した彼に新しい道途を示したものはルソーである。更に、カントにウオルフの唯理哲學と、ニュートンの自然哲學とを傳へたものはクヌツツエンであり、彼に敬虔派の信仰を傳へたものはシュルツである。この他、デカルトもライブニツツもロツクもシヤフツベリーも皆カント哲學の素材となり動力となつのである。斯くして、カントは、一面から見

れば従順な時代の子であると共に、他面から見れば勇敢な時代の叛逆者であつた。然り、啓蒙時代に生れ、啓蒙的教育を受けながら、それに満足することが出来なくて、斷えずこれに反抗し且根柢的に啓蒙思想を破壊したのが、やがて彼の生涯であつた。事實、十八世紀後半の獨逸は啓蒙思潮の全盛期であつた。一切の事象を只理知によつてのみ律せんとし、政治・道徳・宗教・藝術その他百般の事象を悉く傳來思想から抽出して明晰な理知の淨玻璃に照さうとした時代であつた。随つて、そこには神秘・鑑賞・信仰等の入るべき餘地がなかつた。凡てが明確に剖判され、凡てが井然と整頓されて、何等の疑惑も不可思議も残されてゐなかつた。随つて、そこには幼稚な樂天思想が遍滿して生活や文化が偏に散文化してゐた。徹底と深刻とを要求したカントはこの平板と膚淺とには堪へなかつた。感情の人であり意志の人であるカントはこの情意を否定し情意を理知に隸屬せしめた思想と生活とは堪へなかつた。敬虔にして信仰深いカントはこの信仰や神秘や宗教の餘地のない科學萬能の雰圍氣には堪へなかつた。殊に彼は、英佛思想の感化を受けるに及んでその苦悶が絶頂に達すると共にそれを超越する事が出来た。斯くして彼は、ヘルデル・ゴエテ・シツレル・レツスイング等即ちロマンティシズムの文人たちと共に敢然この時代に反抗し、以て

新時代を創造するに至つたのである。この意味に於て彼は十八世紀の完成者にして又その征服者であるといはなくてはならない。即ち、彼は彼の時代から生れたと共にそれを超脱して新時代を産んだのである。十八世紀啓蒙時代の子たる彼は十九世紀ロマンティズム時代の父となつたのである。随つて、カントは決して時代に迂濶な腐儒ではなかつた。事實彼は、千七百五十五年リサボンの地震の際に、地震に關する講義を試みて恟々たる人心を鎮慰すると共に、震災に關する輕浮な論議を非難したり、或は前に述べた如く當局の忌諱に觸れるやうな宗教論を公にしたりした。そして其處に活哲學者としてのカントの苦惱もあり歡喜もあつた。されは、表面冷靜索漠なカントの哲學の紙背行間に、血みどろな彼の内面生活の苦闘と潑刺にして複雑な彼の時代相とを心譚靈觀し得ないものは、未だ眞にカント哲學を味解したと稱することは出来ない。これ、私が、この際眞に有意義にカントを紀念しようとするものは、何よりも先づ彼が獨逸十八世紀の哲學者であつたことを銘記すると共に、彼の哲學を十分に理會することに即して彼の哲學を超越する覺悟と彼の哲學を我が國の現代に活用する聰明とを持たなくてはならないとする所以である。

吁、我が國に於てカント讚美の聲を聞くことはかなり久しい。そして今や刻一刻その聲が高

まりつゝある。抑もこのカント讚美の聲が價値を失ふ時は何時か。否、我が國に「日本のカント」が出現する時は抑も何時か。今や時代は正しくその出現を熱望渴求してゐるではないか。

カントと我が思想界教育界

一 カント誕生後二百年

大哲カントが、西紀千七百二十四年四月二十二日コエーニヒスベルヒ市に呱呱の聲を擧げてから春風秋雨茲に二百年の星霜が過ぎ去つた。新カント派全盛の今日、この大哲の誕生二百年祭を行つて彼の功績を稱へるのも徒事ではあるまい。

今日に於ては、カントといへば、苟くも廣義の文科的教養を有するものゝ何人からも理會され、全世界の哲學史上最高の地位を占めるやうになつたが、彼の生涯は決して幸福なものではなかつた。先づ彼の家庭は、精神的にこそ幸福であつたが、貧乏な馬具製造業者の第四子と生れた彼は、中等教育こそ満足に受けたが、大學時代には學資に困つてゐた。大學卒業後も九年の長い間三豪族の家庭教師となり、三十一歳で漸く大學の私講師となつたが、その翌年から所謂七年戦争が始つたために教授になることが出來ず、十五年間も私講師を勤めてゐなければならなかつた。結婚

も二度機を失したために終生獨身で通さねばならなかつた。更に彼は寧ろ晩熟の方で、その代表作にして不朽の名著である『純粹理性批判』は五十七歳の時の作である。彼の死後ヘーゲルの時代まではフイヒテ・シエリング・ヘーゲル等の有力な後繼者が續出したが、ヘーゲルの死後より十九世紀末までは所謂實證主義又は科學萬能の思想が全歐洲を風靡したので彼の名聲は全く塵にうづもれてゐた。然るに二十世紀末から彼の哲學を研究するものが次第に多くなり、やがて今世紀に入つては到る所に「カントに復れ」の聲を聞くに至り、間もなく所謂新カント派が、獨逸はいふまでもなく、全世界哲學界の中心主潮を形造ることゝなつた。カントも亦嘆して可なりである。

二 我が思想界と西洋の哲學者

翻つて思ふに、我が思想界は永い間摸倣の夢路を辿つてゐた。極言すれば、我が國の思想史はやがて或意味の摸倣史に過ぎない。遠い過去は暫らく措き、これを單に維新後に徴して見ても、明治初年に於てはミルやルソーの自由民権論を輸入し、次いでスペンサーの功利論及び進化論を輸入し、次いでダーウインの進化説が傳はり、更に降つて二十七八年頃にはロツツエがもてはやされ、三十年頃にはニイチエが喧傳され、三十五六年頃にはショーペンハウエル及びハルトマン

に興味を有するものが多かつた。その後四十年頃にはジェームス等のプラグマティズムが思想界の一面を風靡し、大正に入つてはオイケン・ベルグソンの二家が相踵いで歓迎され、世界戦争後にはマルクスが全盛となり、二三年前よりウインデルバント・リツケルト等の新カント派が熱烈な歓迎を受けることとなり、以て今日に及んでゐる。

以上は主として哲學者だけを挙げたのであるが、これらの人達の我が思想界に及ぼした影響には勿論諸多の差別があるが、或程度まで我が思想の發達進歩に寄與貢獻した點に於ては揆を一にしてゐる。

この間に於て、我がインマヌエル・カントは、世界最大哲學者の名聲を荷ひながら、未だ一度も我が思想界から歓迎されなかつたのは何故であらうか。一言にすれば、彼の思想隨つてその行文が難解であつて容易に俗耳に入り難く、容易にセンセーションを起し得ないためである。この意味に於て、私は、最近の我が思想界が新カント派を通してカントの思想を理會し且それに共鳴するものが頗る多きを加へて來たことを衷心喜びとするものである。以下、この見地から、カントの我が思想界教育界に對する關係を一瞥し、以て、哲學學徒の一人として彼が生誕二百年を紀

念することとする。

三 カントと我が思想界

凡そ思想界は、便宜上これを廣狹二義に別つことが出来る。廣義の思想界とは思想生活の全體を網羅したものであり、狹義の思想界とは専門の思想家の世界である。カントは最も嚴密な意味の哲學者であり、隨つてその思想は特別な教養即ち哲學的教養のないものには理會されないものであるが故に、その關係する思想界は單に狹義のものに限られてゐることは改めていふまでもない。否、精密にいへば、實は、狹義の思想界中の哲學界のみに限られてゐるのである。而も、カントの影響は、この哲學界全體にさへ行き亘つてはゐるのである。一般思想界に二義あるが如く、哲學界にも亦廣狹の別がある。廣義の哲學界とは、所謂講壇哲學者と通俗哲學者又は學究哲學者。専門哲學者と常識哲學者。哲學的思想家との思想生活を網羅したものであり、狹義の哲學界とは、單に講壇哲學者。學究哲學者。専門哲學者の思想生活のみを指すものである。由來、カントは、ひとり我が國に於てばかりでなく、全世界を通じて通俗哲學者・常識哲學者からは歓迎されないのが常である。たとへば、通俗的常識的な英國や米國でカント哲學が歓迎されないばかり

か、寧ろプラグマティズムや經驗論者などが極力彼を攻撃非難してゐるが如き、或は佛國に於てカント哲學の信奉者祖述者が少いが如き、即ちこれである。我が國に於ても、古い所では田中王堂氏新しい所では杉森孝次郎氏等は、極力彼を排撃非難しないまでも、その價值をかなり低く評價してゐることは否み難い事實である。況んやその他の一般通俗哲學者。常識哲學者乃至哲學的思想家だけは、大抵カントを蔑視してゐるのである。

然らば、狹義の哲學界全體がカントを歓迎してゐるかといふに、これまた必ずしもさうではない。勿論、苟くも今日眞摯に哲學を研究しつゝあるものゝ中で徹頭徹尾カントを蔑視するが如きものは恐らく一人もあるまい。少くとも、カントがヒュームによつて所謂「獨斷の眠」から醒された如く、カントによつて「獨斷の眠」から醒されぬものは一人もあるまい。随つて、彼等はカントを以て、哲學界の第一人者と見ないものではなく、自ら又カントを尊敬しないものはない。併しながらカントを理會し尊敬すると、カントを歓迎し祖述するとは、勿論その撰を異にする。そして、眞にカントを歓迎し祖述するものは、今日の我が哲學界には案外に少いのである。たとへば、我が哲學界の耆宿たる西川幾太郎博士の如きは、自ら明言してゐるやうに、フイヒテと新

カント派とベルグソンとを調和統一することを主眼點としてゐるし、紀平正美博士の如きは、ヘーゲル哲學に東洋哲學を加味することに主力を注ぎ、得能文博士の如きはフッサールの現象學を祖述してゐる。然らば最も明白なカント學派を以て見るべきは果して誰であらうか。私は、劈頭桑木嚴翼博士を擧げなくてはならない。

便宜上狹義の哲學界は論理派・認識論派と非（反ではない）論理派・非認識論派とに二分することが出来る。桑木博士が前派の首領であり西田博士は後者の旗頭である。西田博士がカントを直接に祖述するよりも寧ろフイヒテに一層多くの共鳴を見出すのに反して、桑木博士は直接にカントを祖述してゐる。即ち博士は主として認識論本位の批判哲學を主張する點に於て、我が哲學界に獨得の地位を占めてゐる。但し、カントの哲學は認識論萬能の哲學でない如く、桑木博士も亦最近或意味の形而上學即ち文化又は文化價値の形而上學を是認する點に於てもカント哲學の面影を宿してゐる。而も博士の哲學には藝術哲學・宗教哲學・道德哲學が缺けてゐる——未だ備はつてゐない點に於て、嚴密な意味のカント哲學の祖述者と稱することは出来ない。

朝永三十郎博士は、カント研究者を以て識られてゐる。但し、博士は、嘗て英米の人格的唯心

論に共鳴したことがあつたり、フイヒテ及びその祖述者たるヴィンデルバント等の所謂西南獨逸派の哲學を紹介したりする點から見れば、桑木博士の如く純然たる論理派。認識論派を以て見ることは出来ないが、カント派少くとも新カント派たることは否み難い事實である。尙この方面に屬する學者に田邊元博士がある。

前述の如く、カント哲學には知識哲學の外に道德哲學・宗教哲學・藝術哲學等の諸方面がある如く、我が國現代の哲學者にも、これらの各一面を通じてカント哲學を祖述するものがある。『主觀道德學要旨』の著者としての藤井健治郎博士は、倫理學上のカント學派たるリップスを仲介者としてカントの道德哲學を祖述してゐるが、博士最近の興味・努力乃至傾向がより多く博士の所謂「客觀道德」に偏してゐるばかりでなく、主觀道德に「自敬」以外「他敬」を認める點に於て純乎たるカント學徒とすることは出来ない。『宗教哲學の本質及其根本問題』の著者としての波多野精一博士は獨逸西南學派を仲介とするカントの宗教哲學の祖述者である。石原謙博士も大體カント派の宗教哲學者であるが、シュライエルマツヘルの宗教哲學に少からぬ共鳴を覺える點に於て純乎たるカント學派といふことは出来ない。藝術哲學は、カント哲學中最も低位を占めるもので

あるが、この方面の祖述者と見るべきものは殆どない。

以上の外、廣義のカント派と見なすべきものには、經濟哲學の左右田喜一郎博士をはじめ、法律哲學・社會哲學・教育哲學等の諸方面にも多少見出すことが出来るが、これらは何れもカントを直接に祖述するものではなくて、寧ろ新カント派の諸家を通じて間接にカントを祖述するに過ぎない。

以上の略述に於ても明かなやうに、カント哲學の影響は案外に狭いのである。即ちそれは専門哲學者のみに限られてゐるのである。そしてこれはカント哲學の性質上當然なことであつて、決してその價值を減殺する所以ではない。問題は寧ろ將來も在來の如き態度を以てカント哲學に對してよいか、それとも別な態度を取るべきかといふことにある。換言すれば、カント哲學を更に通俗化し民衆化し生活化する必要がないかといふ點にある。そして私は、この問題に對して肯定的の解答を以てするものである。然り、私は、カント哲學の通俗化・民衆化・生活化を以てカントの生誕二百年を記念する唯一最高の方途であると確信するものである。

由來、我が國の専門哲學者は餘りに高踏的であつた。斯くいへばとて、私は、哲學を哲學のた

めに研究すること又は大學やその他の専門研究機関に於てこれを純理的に取扱ふことを非難するものではない。要は、これを以て能事終れりとし、自己の研究を阻害しない範圍及びその哲學の價値を損傷しない範圍に於てこれを通俗化民衆化生活化するために努力することを卑下し排斥するのを難するのみである。哲學を價値の學でありとし評價の學でありとしながら、具體的な價値を取扱ひ實際的に評價することを無用有害とすることを難するのみである。哲學は専門哲學者の占有物であつて民衆には不可解不必要なものとすることを難するのみである。勿論、以上の事象は、在來の如く、哲學的興味が専門哲學者の間のみに限定されてゐる時に於ては萬止むを得ないことであるが、今日の如く、哲學的興味がかなりに廣い範圍にまで行き亘り、哲學的教養を有する民衆がかなりに多くなり、且哲學上の問題がかなりに多くなつてゐる時代に於ては、斷じて許し難き缺陷である。然り、今日は正しく哲學者がその「象牙の塔」を出で、巷に活動すべき時である。哲學の生活化に即して生活の哲學化を試みるべき時は正しく今日である。そしてこれは、ひとりカント派の哲學者のみに限つたことではなくて、あらゆる哲學者の共通責務である。但し、斯くいへばとて、私は、勿論、あらゆる哲學者がその専門的研究を中止し、學究的態度を捨て、

哲學の生活化のみに専念し通俗哲學者となれといふのではない。要は、専門的研究をしながらこれを活用し、學究的態度に民衆的態度を加味せよといふのみである。そしてこの點に於て私は桑木博士の態度と功績とを推稱するものである。

但し、カント哲學の通俗化・民衆化・生活化といふことは必ずしも容易なことでもなく、又その全體に行ひ得ることでもないから、カント哲學を活用しようとするには豫め相當の注意が必要である。これを具體的にいへば認識論の細密な點、たとへば超越的論理學の部分などは殆ど通俗化・民衆化・生活化することは出来ない。併しながら、それがためにカントの認識論全體を通俗化・民衆化・生活化することが不必要とか不可能だとかするのは誤りである。何となれば、カントの認識論の根本精神たる批判論批判的精神又は批判的方法を一般に理會させることは、今日極めて必要なことであると共に事實可能なことだからである。更に、理性とか、理念とか、アプリアリとか、先驗的とか、妥當とか、時空とかいふことを一通闡明することもまた必要にして可能である。認識論以外に於て特に必要なのは、道德觀殊に人格主義の道德觀の闡明活用である。見方によつては、カント哲學の精髓はこの人格主義の倫理觀にあるといつてもよい程であるにも係らず、カ

ント哲學の研究者がこれを蔑視し、随つてその倫理學の祖述者活用者が少いのは、私の衷心遺憾とするところである。殊に、この方面はカントの哲學中最も俗耳に入り易い方面であると共に、我が道德界乃至一般社會の現状から見ても多く力説高調を要する方面であるといふ意味に於て、私はカント學者がこの點の闡明と活用とに、特に力を注がれんことを望んで止まない。藝術哲學や宗教哲學の方面は特に改めて通俗化する必要はない。

最後に、カントの現代哲學に對する關係又はカント哲學の歴史的意義及び現代的價值を闡明して、カントの現代文化に對する功績を稱へると共にその活用法を示唆することが必要である。

四 カントと我が教育界

カントは哲學者であつて教育學者ではない。随つてカントの哲學は直接教育界に大なる影響を及ぼす筈はない。併しながら、哲學と教育とが極めて密接な關係を有するものであるかぎり、少くとも、哲學を教育に活用しようとする傾向が優勢となりつゝある今日に於て、カントの哲學が我が教育界に對して没交渉であることは出来ない。事實、最近に於て、新カント派の巨擘たるナトルプの教育學説は、少くとも新進の教育學者にかなりの共鳴を喚起し、惹いて實際教育にも多

少の影響を及ぼしてゐるのをはじめとして、新カント派の哲學説を根據として教育説を構成するもの（たとへば批判的教育學・先驗的教育學・自由教育説等）が輩出する如き即ちこれである。そして後者が我が教育界に對する影響は決して少くないのである。私は、この機會に於て、これらの傾向が益々優勢になり且益々有効にこれを活用するやうになることを要望して止まない。そしてそれがためには、何よりも先づ哲學の意義と價值殊にその教育に於ける意義と價值とを闡明し、更に、哲學的精神を涵養することが必要である。就中、カント哲學の骨子たる批判的精神を全教育界―教育研究者及び教育實際家の精神と生活とに浸潤通徹させるやうにしなければならない。

この他、カント哲學又は新カント派の哲學を活用して眞に哲學的基礎のある教育學説を構成建設することも望ましいことである。殊に私は、教育哲學の研究者がカンの哲學を活用して眞に價値ある教育哲學を創建せられんことを要求して止まないものである。カントの人格主義・主意主義・理性主義を實際教育殊に道德教育に活用することも必要なことである。若し夫れ教育者の人格修養上にカント哲學又はカントの人格及び生活を活用することは、教育界焦眉の急務であるといはなくてはならない。

カントと教育者

四月二十二日は、大哲カント生誕二百年の記念日に當る。内外の哲學界に於ては種々の紀念的企圖が行はれつゝある。この時に際し、教育者にとつてカント乃至カント哲學が何を意味するかを考へて見ることは必ずしも徒事ではあるまい。

先づカントの教育説から檢するに、彼は、ケーニヒスベルヒ大學に於て教育學を講じたことがあるが、それは、彼の意見を體系的に講じたものではなくて、ボツクの「教育術」に依り、自己の意見を加味して講じたものである。彼は又前後九個年間も家庭教師として親しく子女の教育に従事したが、それは教育を研究せんかためでも眞に教育に興味を懐いてゐるがためでもなくて、いはば生活のためであり、且彼の教育術は拙劣であつたとさへ傳へられてゐる。併し、彼が「エミール」を耽讀したことやバセダウの學校を批評したことなどに徴して見れば、彼は必ずしも教育に興味を持たなかつたとはいへない。要は、只彼の教育説は主觀的にも客觀的にも彼の哲學體

系上重大な地位を占めるものではなく、随つて教育者はそれから左程の利益を受けることが出来ないといふのみである。そして彼の教育説は、彼自らの著述中にはなく、千八百三年（彼の死に先立つ一年）に彼の弟子リンクに依つて公にされ、後更に、千八百七十四年ウィルマンに依り、又千八百七十八年フォードに依つて訂正出版されたものである。

カントは先づ人は生物中教育の必要を有するものであり、人は唯教育によつてのみ人たるを得るもので、教育を受けなければ動物性のみ發達して人間の本性たる理性は萎縮するものであるとし、唯一の自然性即ち天與の人性を開發し成就することを教育とし、且教育の目的は世界共通の善を増進することであり、そしてこの目的の達成は單に一時代によつてのみ可能なものではなくて、數時代を通してのみ可能なものであり、随つて人類の解決すべき最難最大の問題であるとしてゐる。更に彼に従へば、教育は保育・訓練・教導に別つことが出来る。保育とは、兒童をしてその性能を有害に使用させないための父母の注意及び幫助であり、訓練とは、人性中の動物的のものを排除するための消極的作用であり、教導とはその積極的方面である。就中訓練が最も重要な地位を占めるのである。教育の方法は、作業を課し、且問答法を用ゐて兒童の心性を啓發し、強

迫によつてではなく、理性の命令即ち自律によつて徳を行はしめるやうにし、衛生上の知識を與へると共に、身體を鍛練することによつてその健康を増進すべきである。以上の意味に於て、數學・遊戯・體操・宗教科等が教科として重大な價值を有する。教育の時期は大凡十六歳までである。尙彼は、人性を必然的のものと自由的のものと又は自然的のものと督智的のものととの二面に別ち、且前者の教育法に於ては大體ルソーの説に従ひ、最初の教育は消極的たるべきものとしてゐる。彼はまた自ら教育されたもののみ能く他人を教育することが出来るとしてゐる。

上記の略述によつても明かなやうに、カントの教育説は、その哲學説に比しては勿論、同時代の他の教育學者の説に比しても決して卓見ではない。若し強ひてその長所即ち現代の教育者が學ぶべき點を挙げれば、教育の價值を重視し、理想及び理論的根據の必要を力説し、自ら教育されたもののみ能く他人の教育者たることが出来るとし、更に教育は一代かぎりのものではなくて繼續的のものであるとしたこと等である。随つて、教育者が彼の教育説そのものから學ぶ所は決して多いといふことは出来ないのである。

併しながら、カントの教育説そのものから學ぶ所が少いといふことは、決して教育者がカント

を輕蔑してもよいといふことではない。蓋し、カントは教育學者でも教育者でもなくて哲學者であり、そして現代の教育者が哲學から學ぶべき點が決して少くないからである。茲に我が國の教育者がカントの哲學を研究する必要があると共に、彼の誕生二百年を祝賀する所以がある。私は、以下この見地から、カント哲學及び哲人カントが吾々に對して教育上何を示唆するかを檢査することとする。但し、茲にはカントの哲學について詳述する餘暇がない。

カントの教育觀以外教育者が彼に學ぶべきところは、第一に彼の人格と生活とである。カントの人格は、その學説のために兎角誤解されがちである。即ち、彼は冷たい理知一片の人、丸味のない論理家理窟屋、又は嚴格峻厲な道學先生のやうに思はれがちである。勿論、カントは學者殊に認識論に主力を注いだ哲學者であるが故に、優れた理知の所有者であり、随つて何事も論理的に考察する人であると共に、本來意志が強く、修養心に富んでゐるばかりでなく、終生獨身で過ごし、七十二歳まで大學教授の職に就いてゐたし、更にその道徳主義が所謂嚴肅主義ソリタス・人格主義又は形式主義で、全然快樂的功利的要素を排斥した程であるから、「水清ければ魚住まず」的な點もあつたらうし、俗人共とそりの合はない點もあつたらうと思ふ。そして、茲にも確かに教育者

の學ぶべき點がある。殊に最近教育者の人格や生活がよい意味の民衆化を通り越して寧ろ俗悪化したことに想ひ及ぶ時に、私は一層カントの人格や生活に學ぶべき點が多いと思ふものである。併しながら私が特に教育者の注意を促したいと思ふ點は寧ろこの他にある。

私は、何よりも先づカントの向上的精神を尊ぶものである。カントは、勿論凡ての天才と同様に卓越した天才を稟有してゐた。併し、彼の偉大は、寧ろ件の天稟の助成に對して不斷の且十分の努力を敢てしたところにあるこの意味に於て、彼の偉大は與へられた偉大ではなくて寧ろ創造した偉大であるといはなくてはならない。事實、彼は、小中學時代には決して人目に立つ程の優秀者ではなかつた。大學を卒業しても直ぐ教職についた譯ではなくて九個年の長い間豪族の家庭教師をしてゐながら學問の研究を廢さなかつた。彼の代表作で不朽の世界的名著たる『純粹理性批判』が公にされたのは彼が五十七歳の時であり、且爾後續々名著が公刊されて七十四歳の時まで及んでゐる。如何に彼が努力の人であり向上の人であるかが推知されるではないか。彼が、大學時代に自力で學資を造り出したことや、十五年間も私講師の逆境にありながら、操守を堅くして他大學からの招聘に應じなかつたのも床しいことである。

カントの博學の如きは只々驚歎の他はない。彼が大學で講義した科目は、形而上學・論理學・數學・物理學・地文(理)學・人類學・法理學・倫理學・教育學といふ多數である。そして地文(理)學の講義が最も好評であるといふに至つては更に驚歎に慣する。而も彼は生涯一度も山も海も見ることがなく、家庭教師として暫らく近村の豪族に住んでゐた外は生地ケーンヒスベルヒの町を一步も出たことがないにも係らず、精確緻密な地文(理)學上の知識を有し、日本のことさへ知つてゐたといふに至つては、只呆然たるばかりではないか。彼が如何に博覽強記の人であり、如何に廣汎な趣味を持ち、如何に修養に努めたかは推察するに難くないと共に、またそこに學ぶべきものがある。

次に、私は、カントの人格に美しい人間味が豊富であることを嬉しく思ふものである。前にも一言したやうに、彼は一見論理や知識の化身のやうに思はれるが、事實は全くこれと反對である。彼が終生結婚しなかつたのも決して主義のためではなくて機會を逃したためである。彼が情の人であることはルソーに共鳴し、その『エミール』を讀むために年來の日課を破つたことに徴しても明かである。尙彼が親交を結んだものに英國の商人が多かつたことや、彼の講義が滑稽諧謔に富んでゐたことや、彼が敬虔な信仰を持つてゐたことなども亦、彼が單に冷たい理知一片の人で

もなく、偏激な道學先生でもなかつたことを證するものである。

第二に、カントの哲學に學ぶべき所は、その批判的精神乃至批判的態度である。何ごとをもその眞實の相に於て見、何ごとをもその根柢までつきつめ、何ごとをも全體的に考へようとする精神と態度とである。批判は否定に即する肯定であり、破壊に即する建設であり、分析に即する總合であり、内在に即する超越であり、随つて創造の一樣相一段階である。この意味に於て、批判的精神はやがて創造的精神であり、批判的態度はやがて創造的態度である。創造を使命とする教育者がカント哲學に學ぶべきは當然のことではないか。

カント哲學がその中核に於て理想主義であることも亦教育者の學ぶべきことである。理想主義を根柢とすることなしには教育の存在も價值も論理上不可能に歸するからである。彼が理性を以て人間の本性とし、且それを創造的のものとし、更に(情)意を理知よりも卓越したものとした點も亦教育上有意義な見解である。「コペルニクスの轉回」といはれる彼の主觀主義即ち「我」の發見と活用とは、フイヒテを起し、現代の所謂價值哲學を興した源泉となつたもので、教育者の大に玩味すべき點である。「哲學そのものは教へることは出来ないが、哲學することは教へ得る」

といふ彼の言も、教育者の反省を促すに足るものである。若しそれ彼の人格本位の倫理觀に至つては、道德の眞髓を道破した卓見であつて、教育者は勿論萬人を光被するものである。更に、彼の認識論は、科學の基礎附又は科學批判を以て認識論の使命とする點に於て教育を哲學的に研究しようとするものに大なる暗示を與へるのである。教育科學を以て足れりとするもの、教育哲學の本質を理會し得ないもの、又は教育哲學と教育科學との關係異同について疑惑を懐くものは、よろしくカントの認識論に就くべきである。

カントについて論ずべきものは勿論尙山程ある。併し茲にはその餘地がない。好悪は別として、カントは兎に角哲學史上第一位を占むべき大哲である。哲學を學ぶものは勿論、一般の教育者と雖も、カント又はカント哲學について一通の理會を持たないといふことは恥辱であり罪惡である。この意味に於て私は、教育者諸君にカントを一通研究されんことをお勧めする。殊に近く岩波書店からは、カントの翻譯が出るから(既刊の部分もある)、せめて三大批判(即ち「純粹理性批判」・「實踐理性批判」・「判斷力批判」)だけは一讀して欲しいものである。尙カントの著書を繙く前に、桑木博士の「カントと現代の哲學」を一讀することの便宜を附記して置く。

カントを記念する途

一

來る四月二十二日はカント生誕二百年に當るので、我が哲學界に於ても種々の記念事業が企てられつゝあるのは洵に喜ばしいことである。好悪は別として、嚴正な客觀的見地から見れば、カントは世界最大の哲學者であり少くとも現代哲學の一大源泉である點に於て、哲學研究者の何人も蔑視することを得ない人だからである。實に、カントがなかつたなら哲學の進歩は必ず幾時代か遅れたことであらう。

斯くいへばとて、私は決してカント哲學を以て完璧とするものでもなく、現代哲學を以てカント哲學に一步も出でないとするものでもなく、随つてカント派以外の哲學を以て全然無價値であるとするものでもない。要は、彼以前の諸哲學を集大成することによつて、哲學に確固たる基礎と一定の體系とを附與し哲學の歩武を正道に導くと共に、幾多重大な問題を殘して後代哲學の源

泉となつた點に於て、哲學史上カントに比すべき光榮ある地位を占めるものがないとするのみである。事實、今日に於て、眞に哲學を研究しようとするものは、贊否はともあれ、苟も何等かの意味でカントを顧慮することなしにはその目的を達成することが出来ないのである。即ち、カント哲學に共鳴するものは勿論、眞剣に彼の哲學を排斥するものも亦それを眞に理會することを要するのである。蓋し、眞の超越は只眞の理會によつてのみ可能だからである。事實、所謂新カント派の哲學なるものはカント哲學を理會することによつてこれを超越せんとするものであるのはいふまでもなく、新カント派以外の哲學に於ても、一見殆どカント哲學と正反對するやうに思はれるジエームズ一派のプラグマティズムを初め、ベルグソンの直觀の哲學にしてもラッセル等の新實在論にしても、更にクロイツェやフツサル等の哲學に至るまで、全然カント哲學と没交渉なものはないのである。況んや新カント派全盛の我が現代哲學に於てをや。これ、私が、誕生二百年の今年に於て、カントを追憶し記念するために種々の方案を講ずることを以て有意義とする所以である。併しながら、苟も「大哲カント」の名に於て行はれる營爲であるかぎり、それは必ずこの大哲の人格と思想生活とにふさはしいものでなくてはならない。

私の知る所によれば、既に企てられつゝある記念事業は決して少くない。就中最も意義あるものは、岩波書店の『カント全集』をはじめ『哲人叢書』及び『哲學古典叢書』の刊行である。カントの著述は、在來とても既にその主著の大半が翻譯されてゐたが、この際これを完成することは極めて有意義なことである。哲學の研究上古典の必要は今改めていふまでもないことであるにも係はらず、哲學書の翻譯はとかく現代のものに限られて、未だ權威ある古典の翻譯を見ることが出来なかつたのは、外國語の素養なき我が國の哲學研究者のために私の衷心遺憾としてゐるところであつたが、上記の企てによつてこの缺陷が満たされるのは慶賀の至りである。哲學が人格的のものであるかぎり、哲學を理會するには哲學者その人を理會することが必要である。それにも係らず、在來の我が哲學界にはこの點に注意し努力するものが少かつたのは遺憾なことである。殊に、十數年前富山房が『哲學文庫』の名に於て『デカルト』、『プラトーン』、『コムト』の三編を公にしたゞけで中止したのを遺憾としてゐたのみか、私自身約十年前早稲田大學の哲學科を背景として『哲人叢書』の刊行を企畫したことさへあるので、上記岩波書店の記念事業を祝福する

ものである。尙同書店發行の月刊雜誌『思想』が『カント號』として記念増大號を出すさうだが、大村書店發行の月刊雜誌『講座』が記念増大號を出すことと共に、勿論有意義な企てもある。

この他、恐らくは哲學講座を有する各大學又は哲學關係の研究會ではそれ〴〵記念祭や記念講演會等を催すことであらう。事實、東洋大學では既に二月中旬逸早くも記念講演會を開催した程である。併しながら斯くの如き企ては、勿論行はないよりはましであるが、而もその意義効果は必ずしも多大であるとは信じられない。然らばこの他にふさはしい記念事業はないであらうか。以下この點に關する私の卑見を開陳して江湖の此判を俟つこととする。

三

第一は、有力な哲學會の組織及びその研究機關發表機關の設置である。在來わが國には哲學會なるものがかなり多くあり、隨つてそれに伴ふ發表機關も少くなかつた。併しながら、在來のは何れもその規模が小さく隨つてその内容が貧弱なものであつた。私の要望するのは、單に一學校一學會の機關といふやうなものではなく、西洋と東洋と官學と民間とを問はず、眞にあらゆる有力な哲學研究者を網羅するものであつて、國家的にも國際的にも我が哲學界を代表する實質を具

へたものである。随つて一方に於て權威ある研究機關を有すると共に、他方に於て同様に權威ある發表機關を具へたものでなくてはならない。但し、茲には詳述の餘地がない。

第二は、我が哲學界の代表的人物の作品を編纂することである。これは勿論單にカントに関する研究だけではなく、眞に獨創あり眞に我が國の哲學として恥かしくないものを集輯して、一つは我が國の哲學界思想界にその水準を知らしめると共に、一つはそれを少くとも英佛獨の三國語に翻譯し、且これを列國の大學や學會や新聞雜誌社等に頒布して、我が哲學界の眞相眞價を普く世界に紹介するやうにすることである。

第三は、哲學科を中等學校少くともあらゆる専門學校以上の教育機關の正科とすることである。哲學的教養の必要は今改めていふまでもない。問題はその方法である。嚴密にいへば、カントの所謂「哲學すること」は教へ得るが「哲學そのもの」は教へ得ないものであるが、一定の方案と素材とによつて哲學を教授することは、一般の學生には勿論哲學を専攻するものにとつても必要有價値なことである。然るに、在來はこの點に關して何等の注意をも拂ふことがなかつた。幸、最近に於て哲學が高等學校の正科となつたが、單にそれだけでは足りない。哲學は高等學校の學

生だけに必要なのではなくて、あらゆる高等教育機關の學生否萬人に必要なからである。この意味に於て、私は哲學を中等學校以上の正科にすることを必要と認めるものであるが、今日の生徒の學力程度や教師の教養資格等から見て、少くとも先づあらゆる高等教育の正科にすることを焦眉の急務とするものである。そしてこれは勿論ひとり文科のみのことではなくて、法科でも醫科でも工科でも商科でも凡ての學部に通するのである。私はこの點に關して文部當局及び學校當局の自覺と奮起とを要望して止まない。因に、中等學校以上の教育者養成機關には一般の哲學以外教育哲學を正科とし随つて教員檢定試験に哲學問題を加味するやうにし、法科には法律哲學、政治科には政治哲學、經濟科には經濟哲學、社會(學)科には社會哲學、文(美術、音樂)科には藝術哲學、宗教科には宗教哲學、史學科には歴史哲學を正科として課するやうにすることを必要と見るものであるが、茲にはこれだけに止めて置く。

第四は、政治哲學、法律哲學、社會哲學、心理哲學、教育哲學等の研究にカント哲學を活用することである。カント哲學及びカント派の哲學は、科學に哲學的基礎を附與すること又は學術に論理的認識論的根柢を附與することを以て一大職能とするものである。事實、我が國に於ても一

般哲學以外、論理哲學、道德哲學、藝術哲學、宗教哲學、經濟哲學、歷史哲學等の研究者たちは、カント哲學又はカント派哲學を活用することによつてかなりの業績を擧げてゐるが、上記政治哲學以下の諸方面は未だ十分にカント哲學又はカント派哲學を活用しないために、示すに足る程の成果ををさめてゐないし、隨つて有名無實の状態に止つてゐる程である。私はこの際に於て、この方面の研究者たちの自覺と發奮とを要望して止まないものである。

第五は、講壇哲學者の活動である。由來、我が國の哲學界には廣狹二つの別があり、そして狹義の哲學界に屬する専門の哲學者またはいはゆる講壇哲學者たちは、其態度が高踏的靜觀的であつて、研究室または講壇以外の活動を卑下し、民衆教化のために努力するものを目して墮落者とするのが常であつた。殊に、カント派または新カント派の哲學を繼祖祖述する人たちは、桑木嚴翼博士等を除いては、この傾向が最も顯著であつたが、これは勿論斷じて誤りである。但し、斯くいへばとて私は、英米流のいはゆる民衆哲學を以て眞の哲學とするものでもなければ、哲學の純理的研究を排するものでもない。否、私は寧ろ哲學の研究そのものは、どこまでも眞理のために眞理を追求し、認識論的基礎と論理的方法とによつて爲さるべしとするものであり、論隨つて

英米流の哲學又は哲學研究法を排斥するものである。要は、いはゆる講壇哲學者たちが研究した理論を實際化することによつて其哲學を眞に有力有價値なものとする熱誠と聰明とを缺くことを難するのみである。然り、私は、哲學を民衆化生活化しないことを難するのではなくて、寧ろ民衆や生活を哲學化しないことを難するのである。哲學を常識化・通俗化し哲學を淺薄にしないことを難するのではなくて、寧ろ常識俗界を哲學化し生活や文化を深・高化しないことを難するのである。哲學者が俗世界や活社會や民衆を超越することを難するのではなくて、寧ろ彼等が單にそれらから隔離してゐるだけで眞にそれらを超越—内在的に超越してゐないことを難するのである。哲學を活用しないことを難するのではなくて、寧ろ活用し得ないことを難するのである。時代は卓越した哲學者の活動を待つてゐる。講壇哲學者たちはこの機會に於て宜しく在來の弊風を一掃すべきである。蓋し、斯くしてこそはじめて哲學乃至哲學者の眞使命を果すことが出来るばかりでなく、更に哲學乃至哲學者の歴史的——現代的意義を發揮することが出来るからである。

第六は、この機會に於て、カントを超越すること、否、外國哲學の羈絆を脱して眞に獨創ある哲學を創建する如き傾向を醸成することである。憶へば、我が國の哲學界は餘りに長い間模倣と

阿附と矯直しとの境地に沈溺してゐた。哲學の生命は創造にある。哲學者の人格を離れて哲學がなく、時代を離れて哲學がない如く、また民族を他にして哲學はないのである。カントを崇拜するはよい。カントを研究するは尙更よい。併しながら「我が師は尊し。されど眞理は更に尊し。」であり、眞の理會は即ち超越である。随つて、眞にカントを崇拜し、眞にカントを研究しようとするものは、カントが十八世紀のドイツ哲學者であつた事を銘記しなくてはならない。否眞にカントを崇拜し眞にカントを研究しようとするものは、何よりも先にそして何よりも明かに、何等かの點でカントにまさつた創見を編み出すことによつてカントを超越しようとする要求を持たないことは、カントに對して最も不忠な所以でありカント哲學を聊かも理會しない證據であることを銘記しなくてはならない。この意味に於て、私は將來我が國のカント研究者から續々偉大なカントの反逆者が出ることを切望して止まない。若しそれこの點を自覺することなくして、徒にカント誕生二百年を記念するが如きは、恐らく只カントの平和な眠を妨げるに過ぎないであらう。

カントの哲學 終

カントの哲學

定價 壹圓

大正十三年五月一日印刷

大正十三年五月四日發行

著 者 稻 毛 金 七

東京市本郷區根津宮永町二九
發行者 曾 根 松 太 郎

東京市下谷區池之端七軒町三七
印刷者 上 野 喜 一

東京市下谷區池之端七軒町三七
印刷所 二 喜 堂

東京市本郷區根津宮永町二九

發行所 文化書房

振替東京二五四七三
電話小石川四五四二



輓近倫理學說研究 三浦藤 著作

菊版三百五十頁、上製函入、定價金三圓、送料十二錢

近世日本の文化と教育 三浦藤 著作

四六版四百五十頁、上製函入、定價金二圓五十錢、送料十二錢

英米小學教育の實際 奥野庄太郎 著

菊版四百七十頁、上製函入、定價三圓、送料十八錢

尋一教育の實際 山本德行 著

菊版三百二十頁、上製函入、定價二圓五十錢、送料十二錢

ダルトン案の批判的新研究 帝國教育會編

四六版三百頁、上製函入、定價二圓、送料十二錢

震災と教育 帝國教育會編

菊版五百頁、並製、定價二圓五十錢、送料十二錢

國際教育の理論及實際 國際教育協會編

四六版三百五十頁、上製函入、定價一圓八十錢、送料八錢

文 化 書 房 出 版

125
175

終

